平成20(2008)年度

卒　業　論　文

表題

秀吉系城郭によるヨコ町型城下町の建設

― 池田輝政を事例に ―

国士舘大学　文学部　史学地理学科　地理・環境専攻

4 年　　学籍番号　17－74562

氏　　名：西潟 秀平

指導教員：岡島 建　先生

提　出　日：平成20(2008)年12月 10 日

要旨

本研究では、秀吉系大名である池田輝政に注目し、他の秀吉系大名が関ヶ原合戦前後で変わらずタテ町型城下町を建設している中で、合戦前後の双方においてヨコ町型城下町を建設した理由を明らかにする。まず、タテ町型城下町の先駆者である豊臣秀吉の城下町プランの特徴を検討するために、彼が初めて建設した長浜城と、大坂城を例に挙げる。そして関ヶ原合戦後、新領地となった秀吉系大名の城下町建設のプランの動向も明らかにする。そして、ヨコ町型城下町の例として、徳川家康が建設した天正期～慶長期の江戸城を取り上げる。さらに、徳川政権成立後の天下普請で建設された彦根城下町のプランも探っていく。そして、同様に池田輝政が建設した吉田城と姫路城の城下町プランを、特に町割プランに注目し、検討し、秀吉の城下町＝タテ町型プランと家康の城下町＝ヨコ町型プランのそれぞれとの共通点や相違点を探っていく。

輝政は、秀吉政権下の中で吉田に入封した。秀吉からの最優先事項が、東国の家康対策を講じることであったために、独自の考えによる城下町が建設できなかった。そのため、前領主のプランを引き継がざるを得なかった。逆に姫路には、家康政権下で吉田時代よりも大加増されて入封した。関ヶ原合戦で軍功を挙げたからに違いないが、家康の女婿となっていたことも理由であった。輝政は、西国将軍と称されていたため、東の将軍＝征夷大将軍である家康に負けないために、さらには、大坂の豊臣家への監視、西国の外様大名に対する押さえにふさわしい城下町建設を考えた。そのためには、武力一辺倒ではない「強さ」を見せつけるために、経済性重視のヨコ町型城下町を建設した。そして、ヨコ町型プランの弱点である、公権力低下を、城下から天守を見上げる景観演出で補った。

目次

要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ii
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・iii
図表目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・iv

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ．従来の研究
　1．　従来の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　2．　タテ町型城下町とヨコ町型城下町について・・・・・・・4
Ⅲ．研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Ⅳ．秀吉と徳川系大名の城下町プラン
　1．　秀吉の城下町プラン
　　1）　長浜城下町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　2）　大坂城下町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　3）　秀吉系大名の城下町プラン・・・・・・・・・・・・・15
　2．　徳川系大名の城下町プラン・・・・・・・・・・・・・・・15
Ⅴ．池田輝政の城下町プラン
　1．　輝政の経歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　2．　吉田城下町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　1）　吉田の城下町プラン・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　　2）　吉田城の景観演出・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　3．　姫路城下町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　　1）　姫路の城下町プラン・・・・・・・・・・・・・・・・・36
　　2）　姫路城の景観演出・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
　4．　輝政の城下町プラン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Ⅵ．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

図表目次

図 1　町割プランの定義と鳥取城下町の宅地割……5
図 2　本稿における町割プランの定義……8
図 3　長浜城下町における町割……11
図 4　豊臣期の大坂城下町……14
図 5　江戸の主要街道とタテ町形成地域……18
図 6　彦根城下町のおける町割……21
図 7　1913(大正 2)年の豊橋周辺図……26
図 8　吉田城下町における町割……29
図 9　吉田城下町の景観演出……32
図 10　現在の姫路市周辺図……34
図 11　姫路城下町の地域割と城下からのヴィスタ……38

表 1　秀吉系大名の関ヶ原合戦後の知行増減……16
表 2　徳川系主要城下町の町割プラン……17
表 3　池田輝政年譜……23

Ⅰ．はじめに

現代都市のルーツの多くは城下町に求められる。いまからおよそ400年前の中世末から近世初頭にかけて、すなわち16世紀の末期から17世紀の初頭に150以上の城下町が建設された。これら城下町のほとんどが、今でも地域の中心都市として機能している。これらの都市には、城下町時代に起源とする空間構成が今なお随所に残され、城下町の象徴である天守や櫓の保存や復元が盛んに行われ、城下町の景観保全の取り組みが進んでいる。戦災を受けた都市でも、城下町時代の街路網を基盤として復興が図られている。現代都市はおよそ400年経っても城下町との強い連続性を保ちつつ存在しているといえる。そのため、地域性が希薄になりつつある現代の日本において、城と城下町の果たす役割は重要であると考えられる。

近世史の舞台であった城下町の研究については、従来の歴史地理研究は、地形図及び絵図を用いた城下町復元、モデル化が主体となっている。しかし、その研究対象の大部分が単独の城下町であるために、復元あるいは同一城下町内での時代的変遷は詳密に明らかにされるが、他の城下町との関係性などの都市群としての城下町の変化や発展過程を透察するまでには達していない。

複数の城下町を研究対象としたもので、矢守(1988)による城下町プランの変容系列に関する類型があるが、この類型は城下町研究に大きな影響を持ち続けている。そこでは、城下町プランを最も外側の囲郭と城郭・武家地・町屋地域などのそれぞれの位置関係に基づいて、「戦国期型→総郭型→内町外町型→郭内専士型→開放型」とし、城の大手からのびる街路と主要な町通りの位置関係による町割を類型化した「タテ町→ヨコ町」、町人地の屋敷割を類型化した「江戸型→京型」という変容過程を多くの事例を挙げて明らかにした。

しかし、城下町における研究課題とされてきたものは、地域体系であったり、空間構造に偏りがちであった。それ故に、それらを築き上げる、中心であった人物に注目した研究には十分な評価が与えられなかった。中西(2000)によれば、その背景には「人物重視の歴

史研究は、ややもすれば英雄史観・個人崇拝へとつながる危険を孕み、歴史のアマチュアリズムに堕するという危惧が実証史学、あるいは社会の法則性を前提とした唯物史観にはあった」と述べている。人物に着目した研究は、今後の歴史地理学において重要であると考えられる。

Ⅱ．従来の研究

1．　従来の研究

戦国期から近世初期にかけて全国で建設された城下町は、様々な分野から研究されてきた。前述の矢守による城下町プランの変容系列に関する五つの類型は、現在の城下町研究において基本となり、程度の差はあるが援用されている。

しかし、この五つの類型に対し、宮本(1996)は、内町外町型が、城下町計画当初の計画理念として内町外町型が存在したかは問題があり、総郭型と郭内専士型に集約可能と述べた。これに対し金井(1997)は、内町外町型では寺町の形成が不明確で、郭内専士型では寺町が囲繞されるタイプが多いことを指摘し、前者を明確な寺町を持たない、寺院統制の不徹底中世的なプランととらえ、後者を、寺町を城下町の囲郭として積極的に取り入れる新しいプランであると捉えた。

さらに、町屋部分に注目した研究も、多数みられる。矢守と足利(1984)による町割プランの定義については、次節に譲るとするが、他にも矢守のプランを踏まえた上で城下町を類型化した松本(1967)は、町屋の形態に注目し、団塊状・街村状・両者の結合状に三分類し、それに藩の規模を小藩（陣屋クラス）・中藩及び大藩・大藩（雄藩クラス）の三区分に対応させた。そして、文献史学の小島(1990)は、大名直属商工業者と市場商人の居住区を、城下の町屋地区に限定し、住まわせたことを明らかにし、前川(1991)は考古学の見地から、長方形街区と短冊型地割をセットとする区画の展開を基に、織豊系城下町の成立過程を5段階に区分した。

この他には、単独城下町を対象とした研究が盛んに行われている。関戸・奥土居(1996)は高崎を、関戸・木部(1998)は館林、渡邊(2004)は大和郡山、藪中(1993)は新宮、水田(1993)では和歌山などを対象とし、それぞれの城下町プラン・変容過程を明らかにしている。

そして、個別城下町を対象としない研究も行われている。水田

(2003)では、紀州藩の城下町（和歌山・田辺・新宮）を対象とし、従来の研究目的とは異なった、新たな見地、つまり対象城下町の街路パターンの尺度の比較を用いて、城下町プランがどのような経過をめぐって普及したかを明らかにした。そして、中西(2000)では、築城の名手である藤堂高虎の城下町と織豊期城下町の完成形である秀吉の城下町を事例に挙げ、秀吉による城下町建設手法が、いかに高虎に受容されているかを目的とした、城下町建設者に着眼点を置いた研究を行った。さらに、中西(2003)では、町割プランにおけるタテからヨコへの変化の画期を、関ヶ原合戦とし、秀吉及び秀吉系大名の城下町は、城に対する求心性が強くあらわれるタテ町型プランを採用し、逆に徳川系大名の城下町では城に対する求心性をもたず、流通経済重視のヨコ町型プランが採用されたことを明らかにした。

以上のように、城下町の類型化に関する研究、町屋地区に関する研究、単独の城下町を対照とした研究は、多数みられるが、複数の城下町を対象とした研究、築城者に注目した研究、町割の変容過程の研究は、数が少ない。その中で本稿は、中西(2000)の文中に「(秀吉系大名である）池田氏の姫路の場合、前領地の吉田も共にヨコ町型であることは注目される。」という文章からヒントを得て、吉田城・姫路城を建設した池田輝政に着目し、ヨコ町型城下町を建設した理由を考察していく。

2．　タテ町型城下町とヨコ町型城下町について

既往の町割プラン研究において、基本となっているのは矢守と足利の分類によるものである。まず、図１より矢守(1988)は、城下における街道の引き込みパターンと、城に対する主要な町通りのブロックの向きによって分類区分を試み、城に対して町通りが縦に走るものを竪町型（または竪ブロック型)、横に走るものを横町型（横ブロック型）とした。それに対し、足利(1984)は、大手通が「町通り」であり、それに向けて間口をひらくタイプをタテ町型城下町、大手通に直交する通りが「町通り」であり、それに向けて間口をひらく

ようなタイプをヨコ町型城下町と位置づけた。

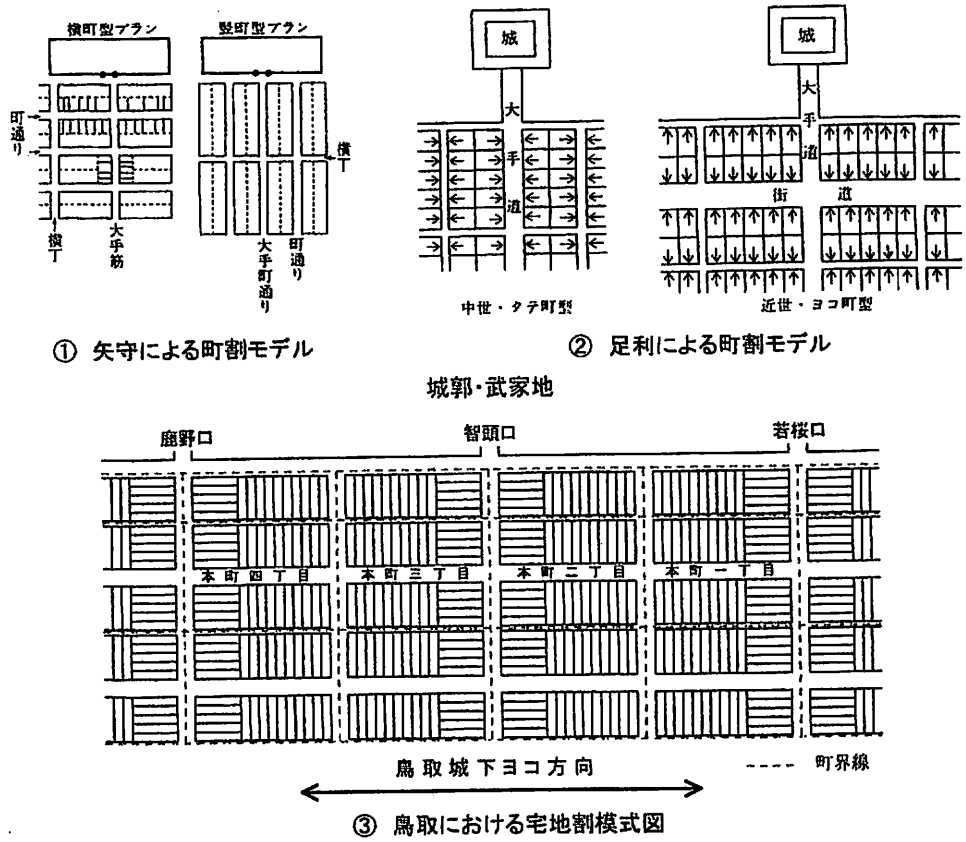


図１　町割プランの定義と鳥取城下町の宅地割　出典：中西(2003)

しかし、中西(2003)によれば、二人の分類区分では、分類不可能な城下町があるとし、鳥取城下町を例に挙げている。矢守の分類区分では、町のブロック割でみると、横町型プランになるが、宅地割をみると三つの口からの街路（特に智頭口からの街路は智頭街道であると共に大手通である）に間口がひらいており、横町型プランとは言えないだろう。さらに、足利の分類基準では、大手に間口がひらいている点ではタテ町型といえるが、大手通と直交する街路にも間口がひらいているためにヨコ町型とも区分されかねないだろう。以上より、町割の分類区分に関しては、見直しあるいは新たな見解が必要だと考えられる。

さらに、両氏は織豊期～近世にかけての町割プランの基本形が、

タテからヨコへと移行するという点では一致している。しかし、その画期については、矢守は「秀吉による長浜城下町建設：1574(天正 2)年」とし、秀吉が大手前を横切るように街道（北国街道）を繰り込んだことを、発端に横ブロック・横方向の町通りの城下町が全国に浸透していったと述べた（矢守 1988)。それに対し足利は、「秀吉による伏見城下町建設：1594(文禄 3)年」とし、秀吉自身の転換でもあるが、そればかりではなく「日本の城下町史上の大転回」と評価した。そしてその後は、全国をつなぐ街道を最重要街路とし、それに城下の主要街区が形成されるヨコ町型が主流になると論じた（足利 1984)。

この二つの説に対し宮本(1993)は、タテ町からヨコ町への転換点を、1600(慶長 5)年の関ヶ原合戦とした。城下の大手通から、城下町支配（公権力）の象徴（天守）を見通せるように設置することが、公権力の存在を住民に知らしめる手段であり、関ヶ原合戦以前の織豊政権下において公権力形成は不可欠であるため、ヴィスタ（見通し）を得やすいタテ町型プランが各地で見受けられたと論じた。そして合戦後は、徳川政権による安定した公権力が確立し、各城の公権力を示す必要がなくなり、大手通と直交する街路（街道）を通してのヴィスタが求められ、天守は公権力の象徴から、街道沿いのいわゆるランドマークとしての役割に変化していき、経済活動を優先させたヨコ町型が主流になると述べた。

Ⅲ．研究方法

本章では、本稿で使用する基本的な史料とその研究方法について述べたい。

吉田城下を描いた絵図の中で、本稿で活用したものは、1644～1648（正保年間）「参州吉田城図」である。池田氏時代（1590(天正18)年～1600(慶長 5)年）の絵図は現存しない。上記の絵図は、吉田城の現存絵図の中で最古のものであり、池田氏時代の城下を推定することができよう。町屋名と、そこに点在する社寺を主に記載している。

姫路城の城郭及び城下町の絵図で使用したものは、1649(慶安 2)年～1667(寛文 7)年「姫路城之図」である。池田氏時代（1600(慶長 5)年～1617(元和 3)年）の『姫路城郭之図』は、内・中曲輪しか描かれておらず、町人地の様子が分からないため本稿では使用しない。上記の絵図は、姫路城下町全体を描いた図としては、最も古い時期のもので、池田氏時代の城下を推定することができよう。町屋地区の町割・寺院の配置について知ることが出来る。

本稿では、これらの史料を使って城下町を復元し、さらにその地域構成を考察する。復元方法として、絵図をスキャンしてパソコンの中に取り込み、図形描画ソフト Adobe Illustrator cs2 を用いて、当時の城下町を復元する。

そして、吉田・姫路の両城の城下町プランを明らかにし、特に町人地に焦点を当て、町割プランを抽出する。さらに、秀吉および秀吉系大名・家康および徳川系大名の城下町プランと照合し、それぞれとの共通点等を明らかにし、その上で、輝政がヨコ町型城下町を建設した理由を探っていく。

なお、本稿では、矢守・足利の町割プランの定義は使用せず、中西(2003)で用いられた、「街路によって区切られたブロックの形態ではなく、町界線によって区切られた個別町の形態に注目し、城郭に対してタテ（垂直）方向の町通りを中心とした町をタテ町、同じくヨコ（水平）方向の町通りを中心とした町をヨコ町と定義する。ま

た、必ずしも城下町全体が単軸のプランで構成されているのではないため、主要な町が構成されているプランをその城下町の町割と定義する（図 2)。」を使用し、論を進めていく。

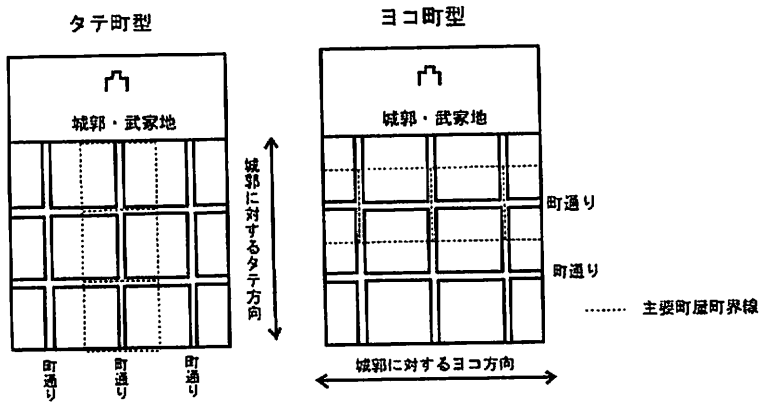


図 2　本稿における町割プランの定義　　中西(2003)より作成。

Ⅳ．秀吉と徳川系大名の城下町プラン

1．秀吉の城下町プラン

本節では、信長が健在であった頃、初めて秀吉が領地を与えられ、自らが建設した最初の城下町長浜、天下人となった秀吉の本城である大坂を対象に、秀吉の城下町における基本プランについて述べる。

1）長浜城下町

1573(天正元)年秀吉は、信長の命令により自ら滅ぼした浅井氏の旧領である湖北三郡 12 万石が、褒美として与えられ一円知行することとなった。領国経営の中心を当時「今浜」と呼ばれていた琵琶湖岸の平野部を選定し、名を「長浜」と改めて城下町建設に着手した。それまでのこの地域の居城といえば、小谷城に構えるのが常識であった。にもかかわらず、秀吉がこの長浜に居城を築いたのには、いくつかの理由が考えられる(宮元 2000)。まず一つは、朝妻港から大津・京へ至る水路交通の要である上、中山道・北国街道へつながる北陸、関東との陸路交通の要であったことが挙げられるだろう。二つ目に、標高 230 メートルの山頂の小谷城は、その城下町の発展性が乏しいのに比べて、長浜は平地で町造りに適している上、当時武将たちを悩ませた一向一揆で知られる浄土真宗寺院の集中する地であり、その支配のためでもあるともいわれる。三つ目には、長浜の北東には鉄砲の生産地、国友があり、鉄砲鍛冶職人らの工房が集落を形成しており、これらを支配、掌握するためとも考えられる。秀吉は、このような軍事性、居住性共に優れた土地を選び城下町建設を進めていった。

長浜城は 1582 (天正 10)年に秀吉が去った後、清洲会議により柴田氏が城主となり、次いで 1584 (天正 12)年に山内氏(4000 石)、1606 (慶長 11)年に内藤氏(4 万石)が入部したが、1615 (元和元)年に摂津高槻に転封の後は廃城となる。山内氏の 1590 (天正 18)年の遠江掛川転封後、石田三成の佐和山入城に伴い湖北支配の中心は長浜から佐和山へと移る。その結果、秀吉の城下町建設以後、都市的発展の

契機となる出来事はなかったため、城郭部以外では当初の秀吉によるプランにほとんど変化がなかったと考えられる。(中西 2000)

長浜の城下町(図 3)は、基本的には同一間隔・同一方位(E15° N)を成している。いずれも完全な十字路で全体が構成されていて、いわゆる遠見遮断になったところがほとんどない。通常戦国期の城下町は、T字型等の不規則で複雑な町割にして、攻められにくくするのが常套手段であるが、長浜においては単純な格子状の町割を採用している。

長浜の町割プランについては、足利(1984)により大手町とそれに並行する本町・魚屋町が上位の街路であるタテ町型であることが明らかにされた。長浜の城下内部は、森岡(1988)により三段階（第一期：1574～1576、第二期：1577～1580、第三期：1581）に分かれて整備されたことが明らかにされている。まず第一期の大手町、（西・東）本町、（西・中・東）魚屋町、（西・中・東）北町、瀬田町、横浜町、大安寺町、紺屋町は、すべて大手口から伸びる大手通りおよび並行する東西路に間口を開き、タテ町を形成している。反対に、第二・三期に小谷城下から移転してきた町はすべて北国街道および並行する南北路に間口を開きヨコ町を形成している。第三期以降は、タテ町、ヨコ町双方が存在するタテ町ヨコ町型になるが、秀吉による建設初期段階においては完全なタテ町型プランと言える。

さらに、伊藤(1992)により指摘された秀吉の特徴でもある「寺社などの中世的先行基盤にむけて町を建設する手法」が、長浜において試みられている。秀吉は城下建設に先立ち、城から大手の延長上に長浜八幡宮を移転させ、新社地に移転する補償として160国を寄進し、あわせて新社地の地子を免じて、社殿を新築するという優遇策を採用した。町割を見ると、湖北信仰の中心として機能していた八幡宮にむかって移転を含めた町づくりが進んだことが想像できる。中西(2000)には、長浜城下町建設時にすでに、後の大坂城下にもみられる『城→大手→寺社』という城下の方向性と、タテ町型という秀吉の基本の様式が完成されていたと述べられている。

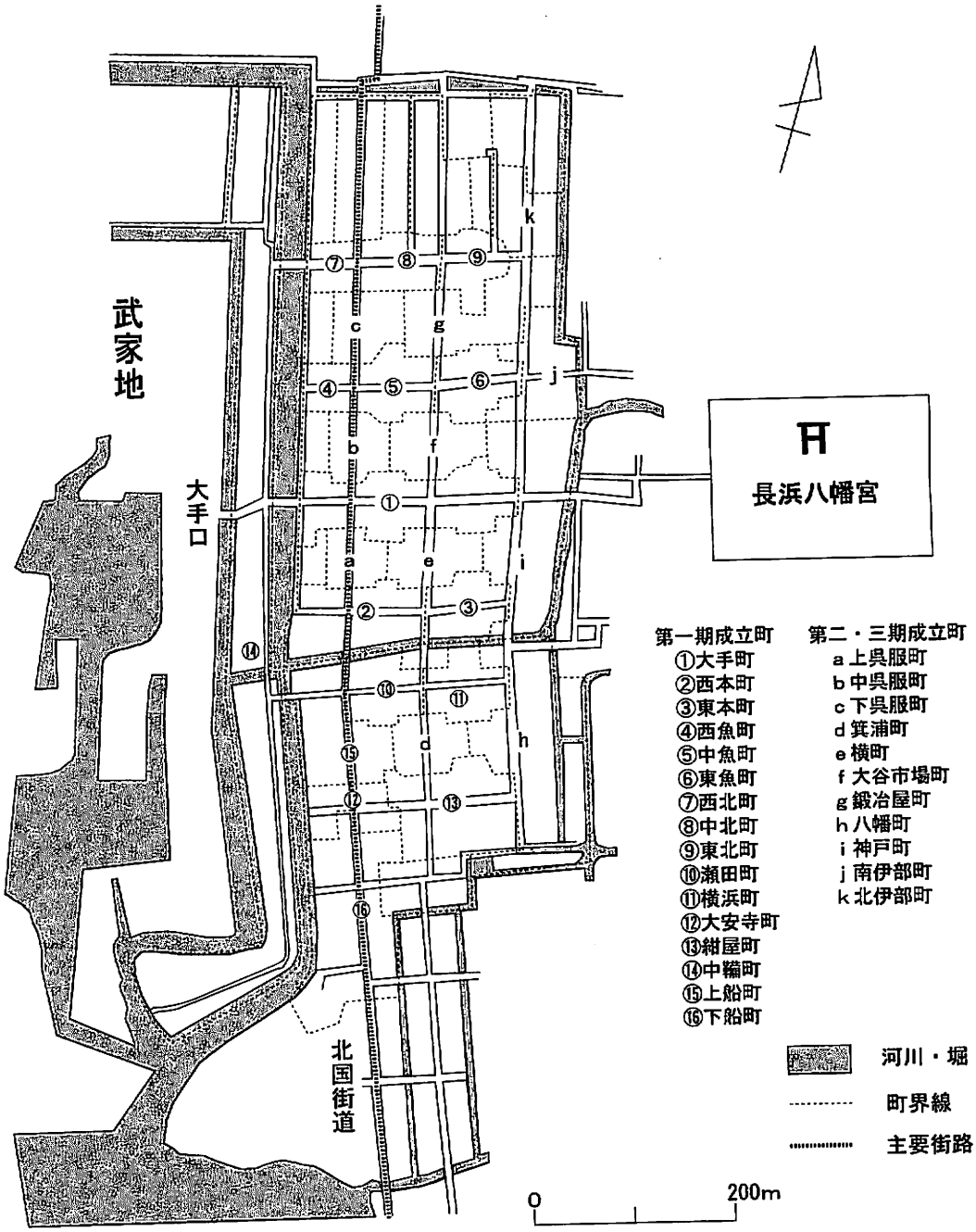


図３　長浜城下町における町割

「長浜大絵図案」（市立長浜歴史博物館『湖北の絵図－長浜町絵図の世界』1987）より作成。

2)大坂城下町

大坂は波静かで安全な航路といわれた瀬戸内海に面し、貿易を行うのに極めて好都合であった。また、海へ流れ込む淀川を遡れば、京の都を経て、琵琶湖に至ることができる水路の要であり、大和川をたどれば奈良へ至り、さらに陸路でも交通の要所として栄えていた。その中でも中心を占めるのは、安定的な地盤を提供してきた洪積層の上町台地であった。中世に入ると、本願寺を都市領主とした石山本願寺寺内町とその南の四天王寺門前町を含む在所は規模においても、その活性化具合においても、中世大坂における二大中心都市と呼ぶにふさわしい存在であった。

天下人秀吉による大坂城の建設は石山本願寺の旧寺地を城地に定め、1583（天正 11)年 9 月 1 日に開始された。この時期の開発では、上町台地上が中心で、とりわけ谷町筋以東の上町・玉造一帯と南の平野町一帯が中心であった。秀吉による初期の都市計画の特徴として、三点挙げられる。①石山本願寺寺内町の要害を再利用した城郭の建設。②町場としての四天王寺門前町の開発。③城と四天王寺を結ぶ「線」上における町(平野町)の建設（また、『柴田退治記』（塙 1893 所収）には、「天王寺・住吉・堺津へ三里余、皆、町・店屋・辻小路を立続け、大坂之山下と為す也。」と記述があるように、堺まで町店、辻小路を立て、大坂の城下に取り込むとしており、堺は大坂の外港化が構想されていた。）これら三点の計画は、中世都市を一方で解体しつつも、その到達点を巧妙に利用し、近世都市・大坂を構築するものであった。

京の公家吉田兼見による日記『兼見卿記』（斉木 1971 所収）には、「1583（天正 11)年 8 月 30 日／在家天王寺へ作続也」と大坂の町屋が天王寺に向かって作り続けられていると記され、翌日の日記には平野郷の住民が四天王寺周辺に移転させられたと記していた。城郭の工事は 9 月 1 日に始まったが、城下町の方はこのとき既に四天王寺までの工事計画が決定されており、町づくりが先行していた。そして、この城郭と四天王寺の間にできたのが平野町である。谷町

筋と上本町筋の間に二筋の道があり、表 120 間、奥行き 20 間の短冊地割が並んでいた。内田 (1989)によれば、その二つの道筋に間口を開き、タテ町を形成していたことを指摘している。さらに、城郭から伸びている上本町もタテ町を形成している(中西 2000)。建設開始時期が早く、たった三ヶ月で町並みが完成していることも併せて考えると、上本町―平野町と連なる南北のラインが重要視されたと考えられる。このラインを大手とみると、この大坂城もタテ町型プランと見ることができる。中西(2000)によれば、それは、長浜城下町と同じく、『城→大手→寺社（四天王寺）→堺』という、寺社あるいは堺に向かって町造りを進める明確なプランを持った城下町であったといえる（図 4)。

さらには、これ以後の秀吉が建設した城下町に見られる「寺町の建設」が大坂城下で初めて見受けられる。豊臣期の大坂城下町の周縁部には 11 ヶ所の寺町が存在したが、大きく見て天満の北を限る寺町（天満東寺町・天満西寺町）と城南の（八丁目寺町・八丁目中寺町・八丁目東寺町・小橋寺町・生玉寺町・生玉筋中寺町・谷町八丁目寺町・西寺町・天王寺寺町）の 2 ヶ所に集中する。このうち八丁目中寺町（図中③）・八丁目寺町（図中④）・天満東寺町（図中⑪）は、天正期の城下町建設と同時にその建設が始まっていた。堀と川によって、それぞれの地域が明確に分かれている大坂にとって、市域の北と南を物理的に遮るものがない。その意味で、北の 2 町と南の 10 町に集中する寺町群は大坂市中の境界を明示していると考えられる。それとともに、南北どちらから侵攻を受けても、敵は最初に僧侶やその寺院に遭遇し、城下の第一の防衛線としての機能も考慮されていたであろう。

こうして秀吉は、上町に侍屋敷と町屋敷を配し、1594 (文禄 3)年には、三の丸と総構えを建設し、城下町全体を囲む総郭型の城下町を完成させた。総構えの外には、四天王寺に向かって平野町と寺町を配し、淀川の対岸には天満寺内町を建設し、複合的な城下町が建設された。

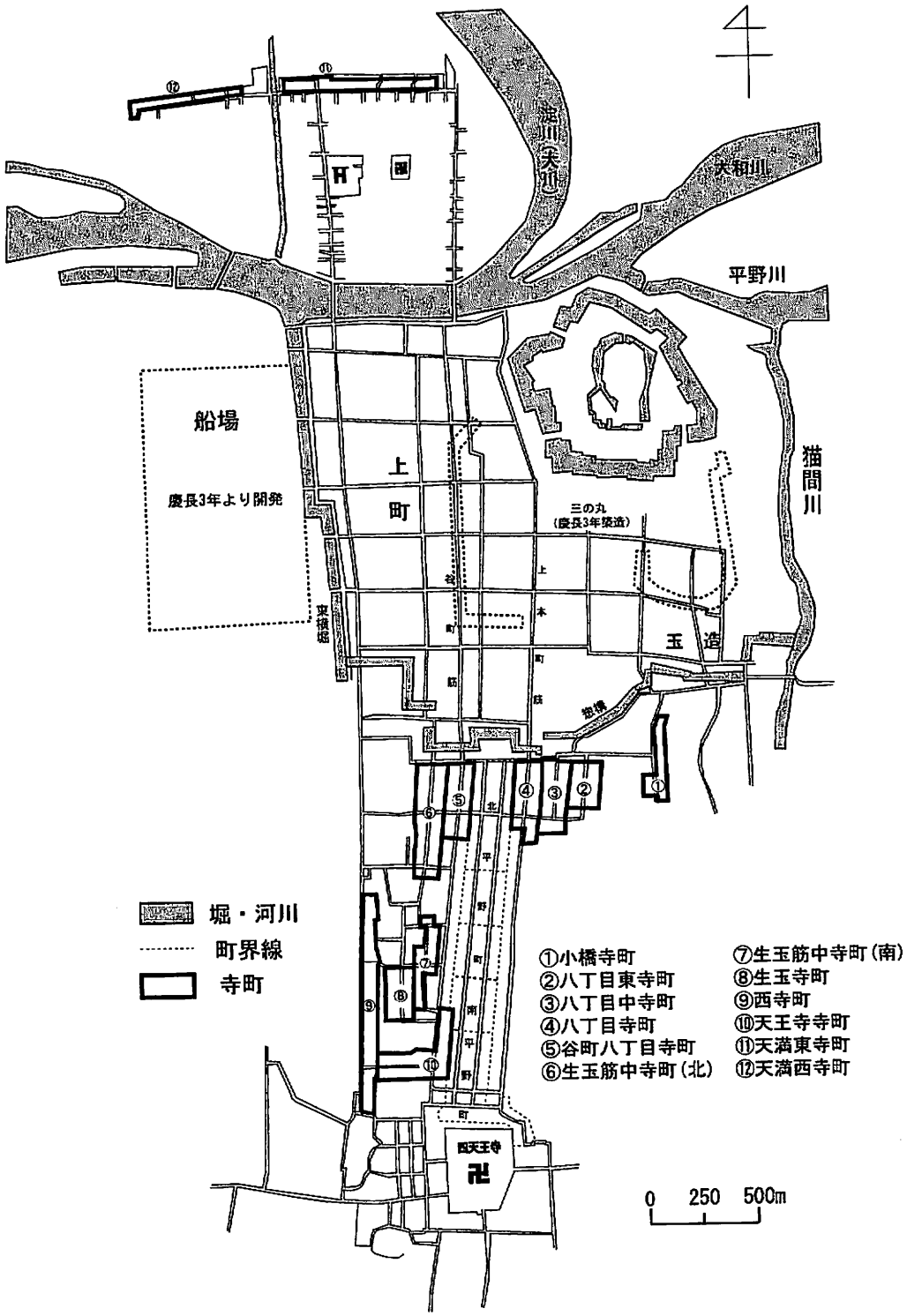


図４　豊臣期の大坂城下町

伊藤毅　編『図集 日本都市史』1993　p133より作成

3)秀吉系大名の城下町プラン

表1は、関ヶ原合戦前後における、東軍に属した秀吉系大名の石高と町割のタイプをまとめたものである。この表から、各大名とも、大幅な加増を受けていることが分かる。そして新領地において建設された城下町は、12例中8の城下町でタテ町型プランが採用されている。さらにその8例中の城下町のうち7例が合戦前後も変わらずタテ町型を採用している。一方、ヨコ町型を採用したのは、姫路・福岡・松江・米子の4例である。これらの城下町はそれぞれ特殊な状況にあったためヨコ町型が用いられたと考えられる。中西(2003)によれば、福岡の場合、間近に中世来の商業地である博多があるため、城下町の商業地機能はさして期待されていなかったと考えられる。松江は、城のある亀田山と宍道湖・大橋川間のわずかな平地に町屋を配するという地形的条件に制約を受けたとした。米子の場合は、先行する吉川氏の城下町が建設途上にあるという条件下で、従来のプランを残したまま、本来城下の縁辺を通る街路（後の出雲街道）を中心に新たな町屋を延長して建設した事例であると述べた。東軍に属した秀吉系大名は、合戦後に大幅な石高の増加があり経済成長が想像できるが、旧来の地から豊臣勢力圏外への転封であるため、0からの統治体系を築かないといけない状況になった。そのような状況の中での城下町は、街道を重視したヨコ町型プランではなく、城下町支配（公権力）の象徴である天守を見通せるタテ町型城下町を建設し、城を頂点としたヒエラルキーを可視化し、領国内の安定した統治を目指さざるを得なかったのだろう。

2. 徳川系大名の城下町プラン

本節では、徳川家康ならびに徳川系大名（親藩・譜代）により建設された城下町を検討していきたい。以下では家康の関東移封後から大坂夏の陣までをみていく。（表2）

1590（天正 18)年秀吉の関東平定の論功行賞で北条氏の旧領を受け継いだ徳川家康は、北条氏の拠点・小田原ではなく江戸に居城を定めた（図5)。当時の江戸城は、破損著しい漏屋ばかりで、その城

表1：秀吉系大名の関ヶ原合戦後の知行増減

大名	旧領地	石高(万石)	町割のタイプ	新領地	石高(万石)	町割のタイプ
池田輝政	三河吉田	15.2	ヨコ町	播磨姫路	52	ヨコ町
山内一豊	遠江掛川	6.8	ヨコ町	土佐高知	20.2	タテ町
黒田長政	豊後中津	18		筑前福岡	52.3	ヨコ町
堀尾吉晴	遠江浜松	12		出雲松江	24	ヨコ町
中村一忠	駿河府中	14.5		伯耆米子	17.5	ヨコ町
加藤清正	肥後熊本	19.5	タテ町	肥後熊本	51.5	タテ町
生駒一正	讃岐高松	6.5	タテ町	讃岐高松	17.1	タテ町
藤堂高虎	伊予板島	8	タテ町	伊予今治	20	タテ町
浅野幸長	甲斐府中	16	タテ町	紀伊和歌山	37.6	タテ町
加藤嘉明	伊予松前	10	タテ町	伊予松山	20	タテ町
福島正則	尾張清洲	20	タテ町	安芸広島	49.8	タテ町
田中吉政	三河岡崎	10	タテ町	筑後柳川	32.5	タテ町

中西(2003)より作成

石高は藤野保校訂『恩栄録・廃絶録』近藤出版社 1970 による

表2:徳川系主要城下町の町割プラン

建設年次	大名	城下町名	石高(万石)	町割のタイプ	全体プラン
1590年(天正18)	徳川家康	江戸	250.0	タテ町	
	本多忠勝	上総大多喜	10.0	ヨコ町	町郭外型
	榊原康政	上野館林	10.0	タテ町	総郭型
	井伊直政	上野箕輪	12.0	タテ町	
1598年	井伊直政	上野高崎	12.0	タテ町	総郭型
1600年(慶長5) 関ヶ原の戦い					
1601年(慶長6)	奥平信昌	美濃加納	10.0	ヨコ町	町郭外型
	松平信吉	常陸土浦	3.5	ヨコ町	総郭型
	結城秀康	越前福井	67.0	ヨコ町	町郭外型
1602年(慶長7)	戸田一西	近江膳所	3.0	ヨコ町	町郭外型
	酒井忠利	駿河田中	1.0	ヨコ町	町郭外型
	本多忠勝	伊勢桑名	10.0	ヨコ町	総郭型
1603年(慶長8)	徳川家康	江戸	250.0	ヨコ町	総郭型
	鳥居忠政	磐城平	10.0	ヨコ町	町郭外型
	井伊直継	近江彦根	18.0	ヨコ町	総郭型
1607年	徳川家康	駿河府中		タテ町	町郭外型
1609年(慶長14)	岡部長盛	丹波亀山	3.2	ヨコ町	総郭型
	松平康重	丹波篠山	5.0	ヨコ町	総郭型
1610年(慶長15)	徳川義直	尾張名古屋	53.9	タテ町	町郭外型
	松平忠輝	越後高田	60.0	ヨコ町	町郭外型
1611年(慶長16)	土井利勝	下総佐倉	3.2	ヨコ町	町郭外型
	藤堂高虎	伊賀上野	24.3	ヨコ町	町郭外型
	藤堂高虎	伊勢津		ヨコ町	町郭外型

中西(2003)より作成。

石高は藤野保校訂『恩栄録・廃絶録』 近藤出版社 1970による。

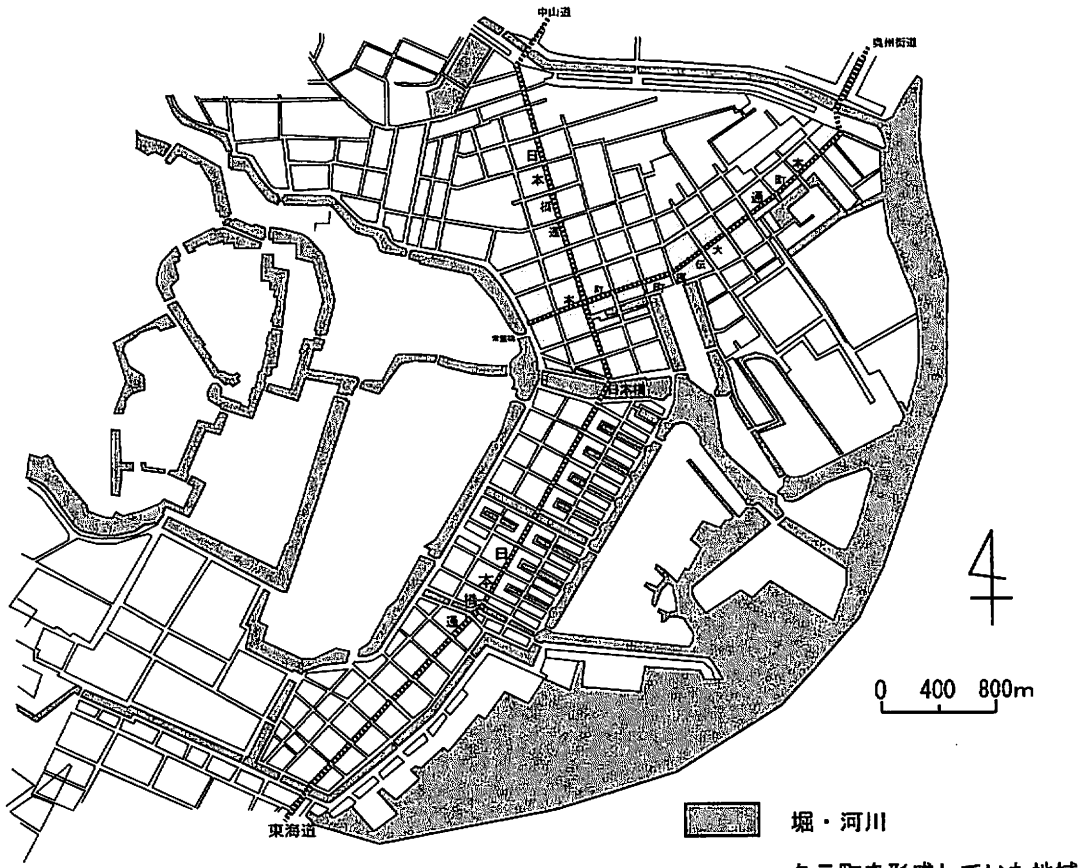


図５　江戸の主要街道とタテ町形成地域

伊藤毅 編『図集 日本都市史』1993　p206より作成

下もまた廃墟同然の城郭と同等を成す荒廃した、たたずまいを見せていた。家康は入国後すぐに城郭の建設に着手するが、これは太田道灌の江戸城を再利用・強化するだけのものであった。さらに城西の防衛上の弱点を補うため、のちの外堀の前身となる堀を開削した。家康は入部して1ヶ月後に城下の町割に着手した。玉井(1988)は、江戸草創期の段階では、「日本橋通りよりも本町通りのほうが主要な街路」とし、後に入れ替わったと指摘した。この本町通りは、江戸城から浅草につながり、その先は隅田川を渡り房総方面に至る街道である。慶長期の江戸の町割全体は日本橋通りを基準としているにもかかわらず、この本町通りと日本橋通りの交差点の町屋敷が本町通りに正面を向けられているのは、本町通りが江戸草創期において最重要街路であったということである。江戸の一大寺院集中地区となった浅草の中核寺院浅草寺には、すでに戦国期に門前町が形成されており、中世において、江戸以上に重要な意味を持っていた浅草寺に向かって町造りがされたのではないだろうか。そのように考えると、草創期江戸の城下は大手門から浅草（浅草寺）に至るこの街路に間口を開きタテ町を形成する、タテ町型プランの城下町といえる。この『城→大手→寺社（浅草寺)』という寺社に向かって町が建設される都市計画は、秀吉の城下町建設においての特徴である「寺社などの中世的先行基盤にむけて町を建設する手法」であると考える。

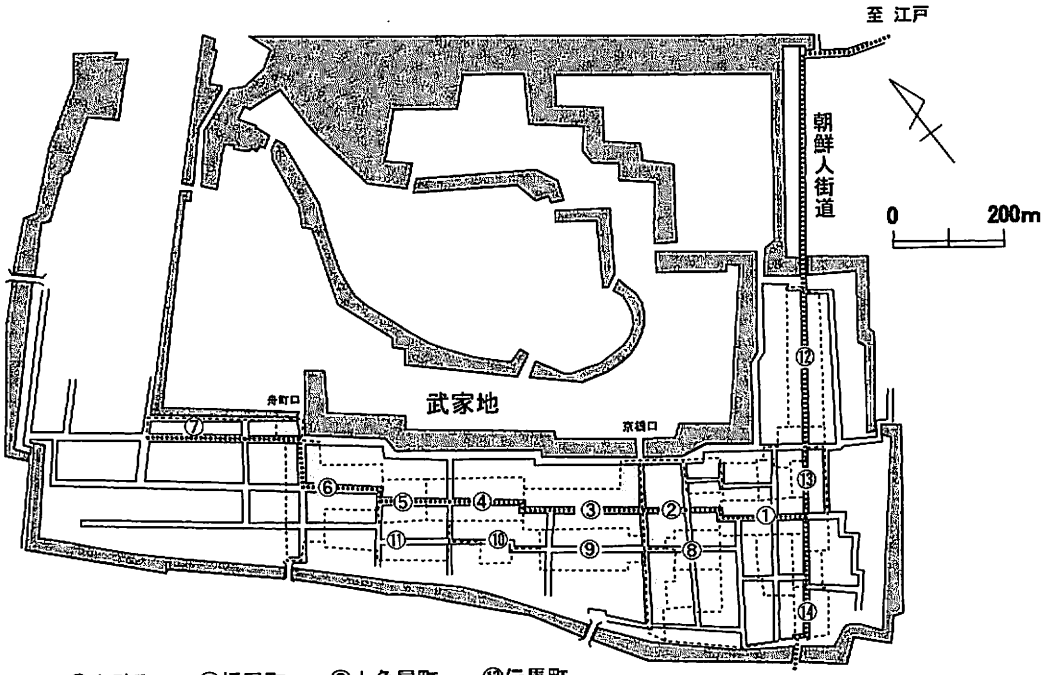
家康は、江戸城下建設とともに、上級家臣への知行割を行い、上野箕輪(12 万石 後に同国高崎)に井伊直政、上野館林(10 万石)に榊原康政、武蔵忍(10 万石)に松平忠吉、小田原(4 万石)を大久保忠世に与えた。以上の城下町のうち、箕輪、館林、高崎がタテ町型プランを採る。

これに対し、関ヶ原合戦以降に建設された城下町の中で、15 例がヨコ町型を採用している。この他にも、関ヶ原合戦以前はタテ町型であった館林は、1597 (慶長 2)年に、新たに組み入れた街道を中心として、ヨコ町型プランに改変されている。同じように、1603 (慶

長 8)年から始まった天下普請により江戸城下もヨコ町型へと変化している。

関ヶ原合戦後、徳川幕府が置かれた江戸は、神田山を切り崩して日比谷入江を埋め立てて城下町の拡張が行われ、このときヨコ町型の町割が施された。主軸とされたのは、天正期の大手通であった本町通と直交する通り町筋で、東海道と中山道を結び、城を取り巻くように貫通した。南北を主軸として、日本橋川に日本橋を架けて新たに造成された町人地と結ばれた。造成された町人地には、原則として京間 60 間の正方形街区の町割が成され、街区中央には方 20 間の会所地が割り出され、南北に伸びる日本橋通りを主軸としたヨコ町型の城下町が形成された。

次に、徳川政権時に、天下普請によって建設された彦根城下町をみていく（図 6)。彦根は陸路および湖上交通の要所で、いまだに権力を保持していた豊臣氏や西国大名に対しての押さえ、朝廷のある都の鎮護を担う戦略的な重要拠点でもあった。そのような地に徳川譜代大名の井伊直政が関ヶ原合戦の功により 1601 (慶長 6)年入部し、金亀山に城地を定め、築城を開始した。彦根城は、琵琶湖沿岸に存在した豊臣氏の城郭を解体・移築して築いたもので、特に石田三成の居城佐和山城からは根こそぎ彦根に運び込まれ徹底的に破壊された。彦根城は、城を中心として同心円状に堀が巡らされて、町地も総構えで囲う総郭型に属する。城下の内町には朝鮮人街道が通っていて、それに直交する街路とともに主要街路であったと考えられ、町屋は二本の街路に間口を開きヨコ町を形成している。内町のヨコ町型町割の町人地は二本の街路が並行し、城の近い表側に商人町（白壁町　図中⑬・本町　同①、②・連着町　同③)、裏側に職人町（紺屋町　図中⑥・魚屋町　同⑦、⑨・職人町　同⑧）が形成され、表側の商人町が主要な町屋である。城の大手へ至る京橋口の本町と舟町口の四十九町に、タテ町型の町割が残っているが、主要町屋群をはじめ、全体的に見ればヨコ町型が卓越しており、彦根城下町はヨコ町型プランといえよう。



①白壁町
②上本町
③下本町
④連着町
⑤桶屋町
⑥四十九町
⑦石崎町
⑧紺屋町
⑨上魚屋町
⑩職人町
⑪下魚屋町
⑫佐和町
⑬伝馬町
⑭通町

堀・河川

タテ町を形成していた地域

町界線

主要街路

図６　彦根城下町における町割

「御城下惣絵図」（彦根博物館 編『彦根の歴史』1991）より作成。

V．池田輝政の城下町プラン

池田輝政(1564～1613)は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕え、いかにも武将らしく豪胆な人物であった評される。輝政は、戦に出るたび軍功をあげていき、主君の信頼を得ていった。しかし、武人として有名な輝政だが、彼には政治・築城の才も有していた。52万石の大大名として築いた姫路城は、秀麗な天守閣と広大な城下町が広がり、現代においてその天守閣は世界遺産に登録されている。

そして、建築家輝政が姫路の広大な城下に採用した城下町プランは、ヨコ町型プランである。さらには、前領地の三河吉田においても同様にヨコ町型を採り入れている。前述のとおり、豊臣恩顧の秀吉系大名は、関ヶ原合戦前も合戦後の新領地においても、変わらずタテ町型プランの城下町を建設している。

本章では池田輝政という秀吉系大名を通して、先にみた秀吉・家康の城下町建設のプランと手法がどのように受容されているか、また輝政オリジナルのプランが見受けられるかを導出する。その対象として、輝政が設計した吉田と姫路の二つの城下町を取り上げ、なぜヨコ町型城下町を建設したのかを考察する。

考察の前に、池田輝政の経歴を『池田家履歴略記』(姫路市 2001 所収）を使用し、信長・秀吉との接点を探ってみる（表 3)。

1．輝政の経歴

池田輝政は、1564 (永禄 7)年に信長の忠臣池田恒興の二男として生まれる。池田氏は清和源氏の流れと伝えられ、美濃国池田荘を領し、荘名を名字とするほどの有力な在地領主であった。輝政の祖父恒利は、織田信秀(信長の父)に仕え、その妻（輝政の祖母）養徳院は信秀の嫡男吉法師(後の信長)の乳母となった。吉法師は、それまでの乳母の乳房を噛みちぎっていたが、養徳院にはそのことがなかった。つまり輝政の父恒興と信長は乳兄弟だったのである。まだ信長が世に出る以前から、池田氏は織田氏と深いつながりがあったことになる。恒興は、母が信長の乳母となった縁により 10 歳から信

表3 池田輝政年譜

年号	西暦	年齢	出来事
永禄7	1564	1	尾張国春日井郡清洲に池田恒興の二男として出生
天正8	1580	16	初陣の摂津花隈城の戦いで戦功をあげ、信長から感状を賜る
9	1581	17	尼崎城主となる
11	1583	19	池尻城主となる
12	1584	20	小牧・長久手の戦いで父、兄戦死。池田家を継ぐ 大垣城に移る
13	1585	21	岐阜城に移る 秀吉に従い紀州根来雑賀衆征伐、佐々成政討伐に向かう
15	1587	23	島津征伐のため九州に向かう 秀吉より羽柴姓を賜る
16	1588	24	後陽成天皇の聚楽第行幸の際に供奉を務め、豊臣姓を賜る
18	1590	26	小田原攻めの功により、三河吉田15万石の加増
文禄元	1592	28	文禄の役。東国の抑えとして朝鮮には渡らず、兵糧の運送役を担う
3	1594	30	徳川家康の次女督姫を娶る
慶長5	1600	36	関ヶ原の役。東軍に属し、岐阜城を攻略。関ヶ原合戦において先鋒を務める。 戦後、戦功により播磨姫路52万石を領有する
6	1601	37	姫路城大改修開始
11	1606	42	江戸城普請役を務める
12	1607	43	駿府城普請役を務める
13	1608	44	丹波篠山城普請役を務める
15	1610	46	名古屋城普請役を務める
17	1612	48	正三位参議を賜る 高砂城築城
18	1613	49	姫路城にて死去

『池田家履歴略記』(1981)より作成

秀の小姓となり、信長の遊び相手となった。その後、信秀・信長のために各地を転戦し、桶狭間の戦いでは、防守・籠城を主張する意見が多い中で恒興が発した積極策＝奇襲作戦で今川の大軍に勝利を収めた(桶狭間の戦いには幾つかの諸説あるが、豊橋市(1973)には、「右府（信長)、恒興が謀によりおほいに勝利を得たり」と記されている)。1580（天正 8)年、信長は恒興父子に、謀反人荒木村重の征伐の命を出した。この時輝政は初陣にもかかわらず、敵の首級を挙げ、信長から「古新（輝政の幼名）年わずか十六。敵陣に入り大いに武勇を振るひ、真に池田紀伊守（恒興）の血筋也。信長の眼力に叶ひ、その手柄無類也」という感状を賜り賞賛されている。その功により、池田父子には摂津が与えられ、輝政は尼崎城を居城とした。1582(天正 10)年本能寺で信長が没すると、いち早く秀吉軍の主力として、明智光秀討伐に加わった。この時、秀吉の甥秀次を女婿とし、輝政を秀吉の養子とする約束が成された。その後、羽柴秀吉が信長の後継者となり、柴田勝家没落後、池田父子は美濃に封ぜられ、輝政は池尻城に入城した。1584（天正 12)年に父と兄元助とともに小牧・長久手の戦いに出陣したが、父と兄をともに失う。秀吉は恒興・元助の死を悼み、生き残った輝政・長吉(恒興の三男)を深く憐れんだ。恒興の母養徳院へ送った書状の一節には「われらちからおとし申事かすかきりも御さなく候」また「三さへもん殿（＝輝政）藤三郎（＝長吉）との両人なに事なき事われら一人のなけの中によろこひとはこの事にて御さ候、両人はせめてとりたて申候てこそ勝入（＝恒興）の御芳志をおくり申へく候と満足つかまつり候事」と、輝政兄弟を盛り立てることを約束し、それまでの池田一族の軍功に報いる形で、輝政に遺領を相続させ、美濃大垣城主に任じた。翌 1585（天正 13)年岐阜城に移り 10 万石を領す。三月には、秀吉に従い紀伊の雑賀・根来攻め、八月には佐々成政征伐に加わるなど転戦を重ね、1587(同 15)年九州征伐にも従軍し、凱旋の後秀吉の仰せにより、池田氏を改めて羽柴姓を名乗ることになり、従五位下に任命された。その翌年には後陽成天皇の聚楽第行幸の際に供奉を務め、豊臣姓を賜るなど、

秀吉の信頼を得ることで、忠実な豊臣大名の一人として地位を固めていったのである。

2．吉田城下町

太平洋ベルトの地理的中心点である愛知県豊橋市は、近世まで吉田と呼ばれていた。吉田は、東に赤石山脈弓張山系と北部の木曽山脈の南端部となる本宮山地との間の豊川が貫流する東三河平野の南東部に位置している（図 7)。また、渥美半島の基部でもあり、西は三河湾、南は太平洋に面し、領内には東海道が通っており、東三河の要衝であった。こうした地理的要因は、交通・軍事・政治上からも重要視され、戦国期において、吉田を巡る戦いが多くある激戦の地でもあった。

図 7　1913(大正 2)年の豊橋周辺図　平岡(2000)より引用

豊川と朝倉川が合流する吉田の地に初めて城郭が建設されたのは、室町末期の 1505(永正 2)年の牧野古白によるものであると考えられ、往時は今橋城と称していた。今橋城の縄張りがどのようなものであったのか、それを裏付ける史料はない。唯一の手がかりとなるのは、『牛窪記』(塙 1958 所収)に「依テ入道ガ淵ノ上、馬見塚ノ岡ヲ引キナラシ数千ノ人夫ヲ集メテ(後略)」とあり、塚・岡の名称からも実際にはそれほど広い場所を指したものではなく、入道ヶ淵と称された深い淵の上にある起伏のある台地を生かし、谷を自然掘とした程度のものであったと考えられる。その後、今川、戸田、

牧野の三氏による激しい争奪戦が繰り広げられたが、1565(永禄8)年松平(徳川)家康に攻略され、それ以後は安定した時期を迎える。その前年に三河一向一揆に勝利し、西三河を平定した家康は吉田城を手に入れたことで三河統一を果たした。そして吉田城には重臣酒井忠次を置き、東三河支配の拠点とした。1570(元亀元)年に忠次により、豊川に土橋が築造された。それ以前における豊川架橋はすでに廃絶し、当時は渡船に頼っていた。従来、吉田城は西に対する備えに豊川を利用しており、軍備上の見地から橋梁の設置は犠牲になっていたのであろう。しかし、吉田城を含めた東三河が家康の支配下に入ったことで、岡崎と吉田の交通が頻繁となり、これに加えて遠州進出の際には前線と三河の連絡の必要もあり、豊川の架橋が行われたと考えられる。豊川架橋については『船町記録』(豊橋市役所1964所収)に「酒井左衛門尉忠次君当御城主之節、元亀元年迄ハ今之御城内八丁目通往来ノ街道有之、右御城内関屋ト申所渡船場ニ御座候所、其年土橋出来ニ相成、渡船相止申候義ニ御座候」とあり、また『宝暦三年船町庄屋書上控』(佐藤 1971所収)には、「百八拾四年以前元亀元年庚午年申伝候、酒井左衛門尉様当御城御拝領之由、翌年土橋初御掛被遊候、夫迄ハ吉田川渡船ニ御座候、場所当時御城外郭関屋口申所下地村へ御掛被遊候」とあることにより、元亀元年に土橋が架橋されたと考えられる。だが、豊川本流に土橋を架けてしまえば、川を堰き止めてしまう事になるため、本当は木橋であったのを土橋と誤って記述したのかもしれない。

松平家の家臣で初めて城を与えられた忠次は、吉田城にあって東三河国衆を統制し、1588(天正16)年に忠次が隠居すると、その子家次に引き継がれ、2代28年にわたって在城し、その後、1590(天正18)年小田原制圧後の論功行賞による家康の関東八州移封に伴い、酒井家は下総臼井3万石に転封となった。その時まで三河吉田城は、三河・遠江境の重要拠点として、徳川氏の要の城としての役割を担っていた。

1) 吉田の城下町プラン

1590（天正 18)池田輝政は、徳川家康の関東移封に伴い、岐阜から吉田を中心とする東三河 15 万 2 千石に封ぜられた。16 世紀に牧野古白によって築かれた城と同じ場所に築城を始めた。15 万余石の石高をもってすれば、また秀吉直臣の輝政としては、当時の吉田城が、それにふさわしい規模ではなかったのであろう。そのため輝政は、石高に見合った居城とするために、縄張を大きく広げて、総構えの中に多くの家臣を住まわせる城づくりに取りかかった。同時に城下町建設にも積極的に取り組んだ。吉田城下町は、輝政在城 10 年の間に、これまでの中世の小規模な城から石高相応の大規模な城下町に進化したのである。

輝政の播磨姫路への転封後は、竹谷松平氏が二代、深溝松平氏二代、水野氏二代、小笠原氏四代、久世氏一代、牧野氏二代、大河内松平氏一代、本荘松平氏一代と続き、そして再び大河内松平氏が七代続いて明治に至った。幕藩体制が確立されてからは、徳川譜代大名が激しく交替した。幕末までの 250 年間に 9 家 22 名の城主を送り迎えた。しかも、石高わずか 3 万石～8 万石という中小クラスの大名であるため、当初の輝政による城下町は大きく改変されることなくそのまま保持されたと考えられる。

吉田の城郭部の縄張は、本丸を同心円状に二の丸が取り囲んで、さらにはこれを三の丸が囲む曲輪配置で、輪郭式といわれ、吉田の場合は豊川が円を貫く形で通っているため半輪郭式といわれている（図 8)。その周囲にめぐらした土塁と堀とを隔てて侍屋敷が軒を連ねており、さらに城郭と侍屋敷の外側に総堀をめぐらして町屋地域と明確に分離されていた。また、輝政時代の堀は空堀であったことが、昭和 46 年からの調査のよって明らかにされている。城の背後に吉田川の流れはあるが、水位の関係上これを引き入れることが出来なかったのである。加えて、空堀は、近世期には利用度が減るが、戦闘面からみれば、落ち込めば必ず負傷し、舟などで近寄ることも出来ないため、水堀より要害堅固されていて、生粋の戦国武将であった輝政ならではの普請ではないだろうか。

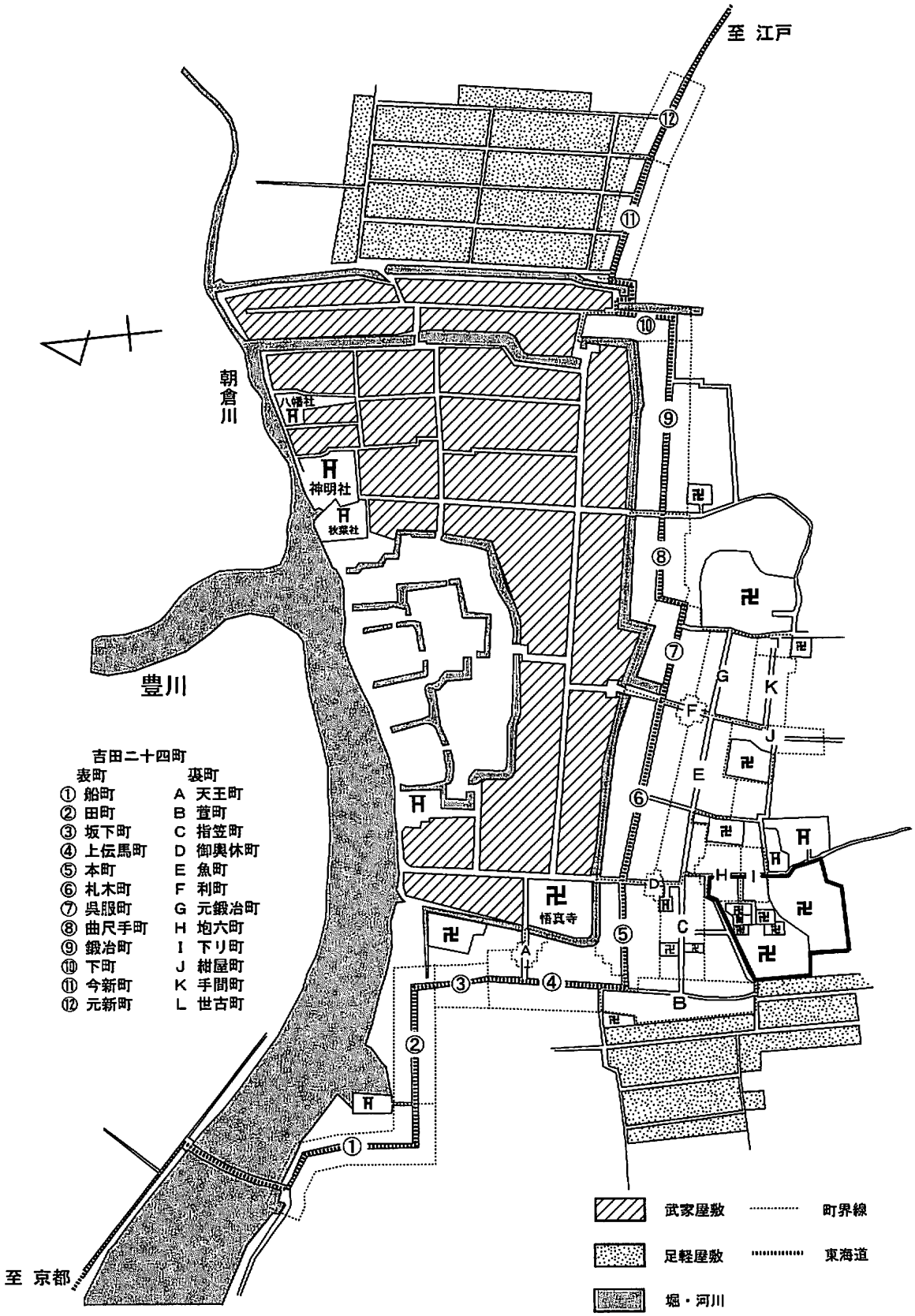


図８　吉田城下町における町割

『正保年間 三州吉田城図』 豊橋市立図書館所蔵　より作成。
町界は『明治17年地籍字分限図』より。

町屋部分に目を移せば、城下を東西に貫くように通っている東海道に沿う表町 12 町（船町・田町・坂下町・上伝馬町・本町・札木町・呉服町・曲尺手町・鍛冶町・下町・今新町・元新町）とその背後に位置する裏町 12 町（天王町・萱町・指笠町・御輿休町・魚町・垉六町・下リ町・利町・紺屋町・元鍛冶町・手間町・世古町）の合わせて 24 町で構成されていた。輝政によって創設された町は定かではないが、松平忠利の時代(1612～1632)に鍛冶職人を元鍛冶町から街道筋に移して、これを鍛冶町とした。そして、水野氏時代になると、坂下町・御輿休町が町屋となり、小笠原時代には、下リ町・元鍛冶町も町屋となって、城下町の形態が整っていった。各町とも街路を挟む両側町を形成し、短冊型の地割がされており、表町のほうが、町行が広く、奥行きもある家が連なっている。さらには、札木町・本町・呉服町の三町を中心に、広い間口を有する家が多く、中心から離れるに従って、次第に間口の狭い家が多くなっている。城下町建設当初の宅地割を示す絵図は現存しないが、貞享年間(1684～1687)の『吉田宿東海道筋町別地図』（豊橋市役所 1964 所収）から読み取る限り、吉田は、東海道筋およびそれに並行する街路に間口を開く、純然たるヨコ町型城下町であると考えられる。

次に、吉田城下の寺社地を見ていく。まず、城内の武家地内には、曲輪の鬼門（北東）に当たって、神明社とその東側に八幡社・秋葉社、裏鬼門（南西）の方角に悟真寺、さらに三の丸と堀を隔てて西側に天王社（後に吉田神社）があった。城下に目を向ければ、城下南西部に寺町を形成している（図 8 中 太枠線内）が、『豊橋百科事典』（豊橋百科辞典編集委員会 2006）によると、酒井氏時代に形成された町であることが分かる。城下各所に寺社は見られるものの、寺町といえる地域は見当たらないため、輝政は秀吉の城下町建設の手段の一つである「寺町建設」を行わず、酒井氏時代の寺町をそのまま利用したと考えられる。

輝政は、吉田入封後から城郭・城下町の建設に着手しているが、この建設には、秀吉の意見が多分に盛り込まれていたと考えられ

あろう

る。家康を関東へ遠ざけたとはいえ、奥州の伊達家などと結託すれば、厄介な存在となるため、東海道の要衝には自らの子飼いの大名を配置し、家康を牽制したのである。これは、秀吉による全国統治構想の中で、東海地域が重視されていたことの表れであり、日本列島の中間地域の掌握と対東国対策という考えであったといえるだろう。こうした背景から、東海道筋の大名には政権サイドから様々な統制や命令があったと想像できる。試みに同じ三河岡崎に入封した田中吉政の政治をみると、太閤検地、城下町改造、寺社領への関与など（新行 2005）であり、大概的にみれば、輝政と共通するため、秀吉の指示だったのであろう。このほかに輝政には、吉田大橋の建設が秀吉から指示された（豊橋市史編集委員会編 1973）。輝政自身も、家康対策として城下東部の二条の堀の掘削、柳生門から新町口における、東海道の西側からは進入しやすく、また退却しやすいが、東からは進入しにくくしている複雑な入口の構造を持った門の設置などを施すにとどまった。

秀吉の統制下では、東国対策が最重要で、自らのプランを実行に移すことが困難であったと思われる。そのため、酒井氏時代に整備されていた東海道を利用し、前述の寺町のように再利用できるところは利用した城下町を形成していったのではないだろうか。

2）吉田城の景観演出

この項では、作成した吉田城の地図を基に吉田城の景観演出を検討する（図 9）。

吉田城は中世以来、東海道が豊川を渡河する地点にあたり、交通の要衝として重要な位置にある。池田輝政が築城するに当たっても、この東海道との関係を重視したであろうことは容易に想像できる。東海道との関係を検討すると、西から吉田城に向かう東海道は下地町あたりで直線的になっている。逆側の東から吉田城に向かう東海道も柳生門から新町口にかけての部分で曲尺手になり、入口構造が

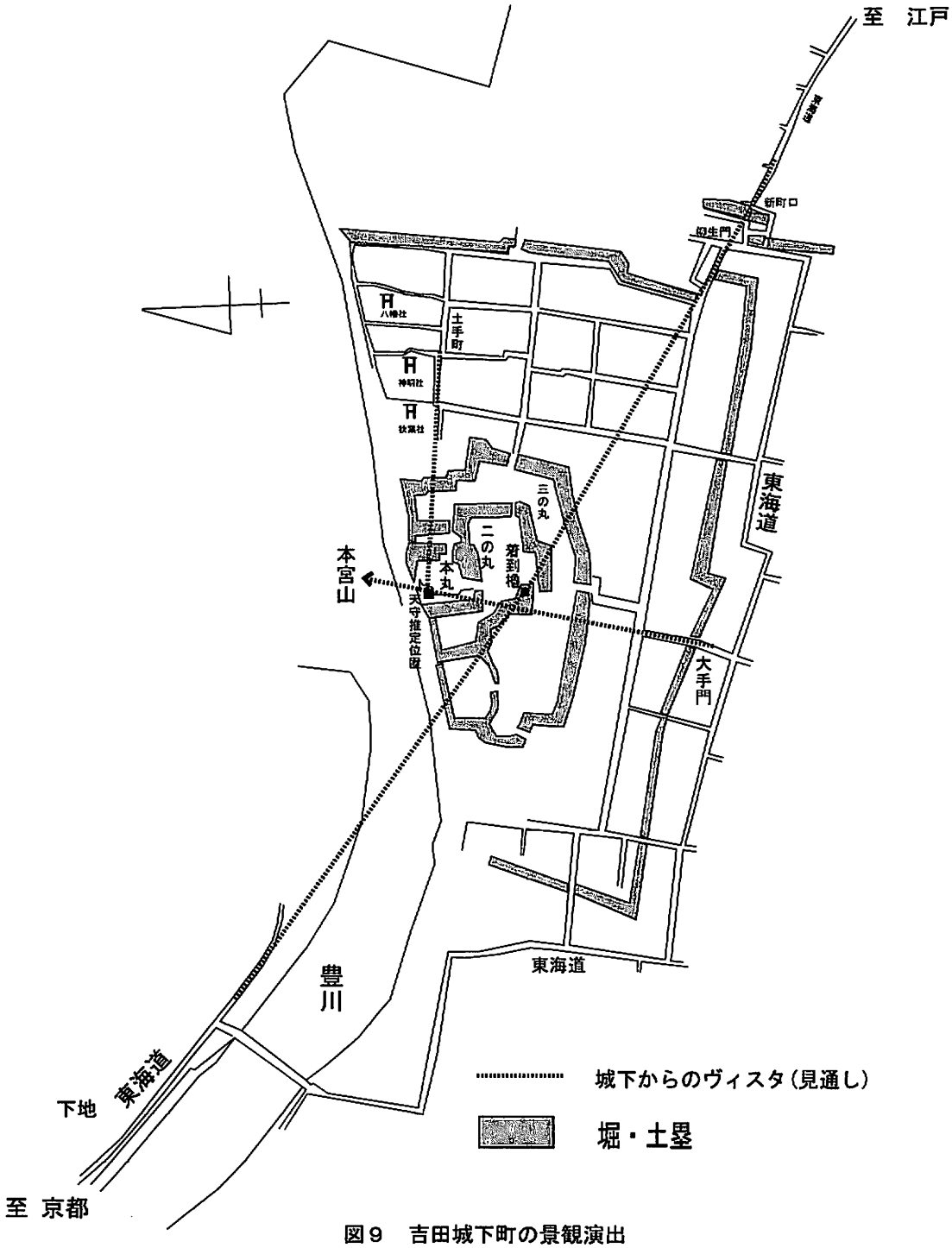


図９　吉田城下町の景観演出
豊橋市教育委員会編『吉田城いまむかし』1994　p91より作成

複雑になっているが、これより東側は直線的になっている。この直線部分を延長すると吉田城内で交差する地点がある。それは、発掘調査により確認された、二の丸の堀の土塁上にあったと推測される着到櫓である。つまり、着到櫓からは東西の東海道上の見通しが確保されているのである。また、吉田城内で石垣があったとされるのは本丸の堀と着到櫓周辺の二の丸口門付近の堀だけであり、この事からも着到櫓の重要性が分かる。次に、この着到櫓を中心に検討すると、大手門と着到櫓を結んだ線が本丸内を通っている。この線を延長すると、本丸の背後では遠く本宮山にあたる。この本宮山には、昔から信仰を集めてきた砥鹿神社奥宮があり、領民の信仰の対象となっていた。吉田城の絵図には本丸の鉄櫓の位置に天守と書かれたものがある。土手町から西に直線的にのびる道路を延長するとこの鉄櫓にあたる。これは、土手町の通り沿いには、城内神明社・秋葉社・八幡社があり、その参詣者が城を見上げたときに、天守が目に飛び込んでくるという景観を意識したものだと考えられる。そして、この線は大手門からの線と交差する。鉄櫓からは東と南方向の視界が確保されており、本丸に築造予定であった天守の位置は絵図どおり鉄櫓の付近であった可能性が高い。大手門と天守（鉄櫓）を結ぶ線は着到櫓を外し、その西側の堀の上を通っている。これは東海道を往来する人々が、東海道と大手口からの街路との交差点から大手門を見たとき、その背後の本丸を見やすくするとともに、右に着到櫓、左に本丸の天守、さらにその背後の本宮山がそびえるという景観を造りだすための工夫と考えられる。こうした、城下の信仰の対象である寺社への参道から天守を見上げる景観演出と大手門を通して、天守を見通し、その背後には昔から信仰を集めてきた本宮山を利用する景観演出は、秀吉にとっての、中世的先行基盤を利用した領民の人心掌握と自らの権力を示すための方法と同等の効果があったと考えられる。

3．姫路城下町

姫路は、標高 50m ばかりの小丘が点在し、遠く東に桶居山、北に広峰山・増居山・書写山、西に京見山と三方を囲まれ、中央に市川が流れる播磨平野の中西部に位置する（図 10)。播磨平野は播但高原から西に続く中国山地に源をもつ数本の川がつくりだした沖積平野で、なかでも市川によって形成された扇状地・三角州が中心部にあたり、その上に市街地が広がる。その市街地は、西国街道・丹波街道・篠山街道・但馬街道・因幡街道が通り、さらには南方に古代からの港である飾磨津があり、陸上、海上交通の要衝でもあった。

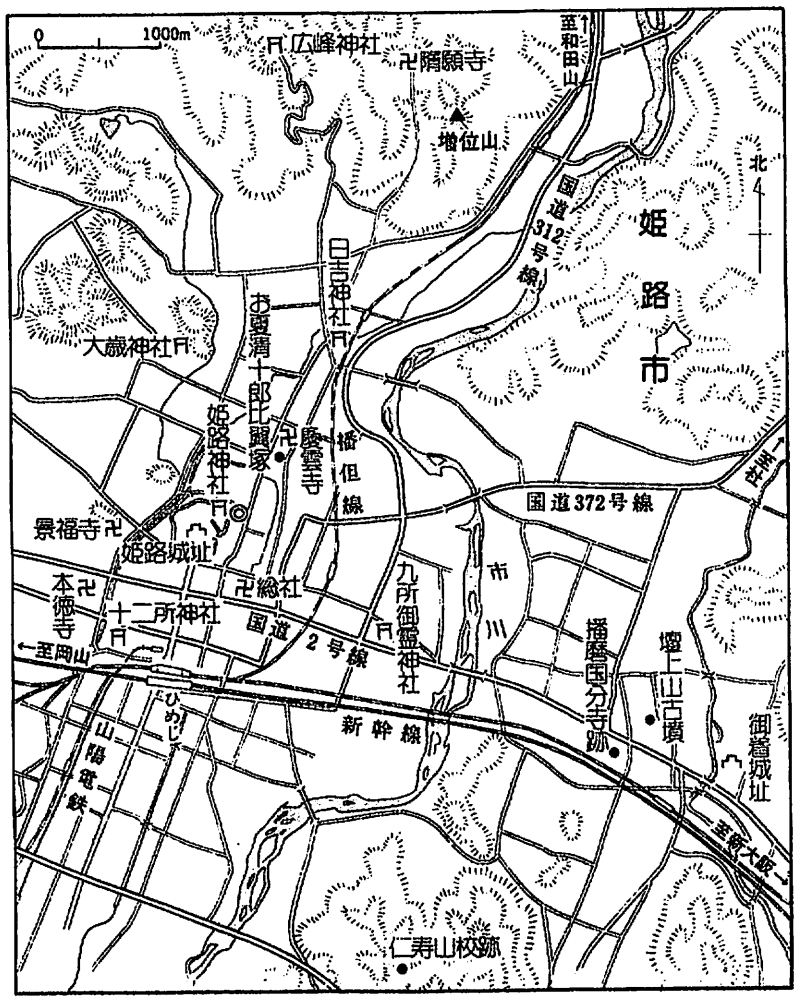


図 10　現在の姫路市周辺図　　出典：高野（1981）

姫路城天守の築かれている姫山は広い播磨平野に点在する小独立丘の一つである。橋本(1994)によれば、ここに城郭を最初に構えた人は、1333(元弘 3)年姫山に砦を築いた赤松則村である。次いで赤松貞範が 1346(正平元)年姫山の砦を城に改修して以来、秀吉が1580(天正 8)年姫路に築城するまでのおよそ 250 年間は、室町初期の守護大名の時代から応仁の乱後の戦国大名の時代にかけての動乱の時期であり、姫路付近を支配した領主は姫路の地に築城後も守りに不向きという戦略的配慮から、数年の後には姫路から数キロ離れた地に要害堅固の山城を築き移っていった。姫路がある播磨国は、京がある畿内に最も近い畿外であり、陸・海の交通の要衝のため、戦国期には姫路付近でも小戦闘が繰り返された。その影響で秀吉が姫路に転封してくるまでに、姫路城は赤松氏～小寺氏～山名氏～赤松氏～小寺氏と城主が頻繁に替わっていった。当時の姫路城の規模は定かではないが、第二次小寺氏時代には、姫路城は本城ではなく出城としての役割であった（姫路市 2001）ため、さほど大規模な城ではなかったと考えられる。1568(永禄 18)年 9 月、織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、10 月義昭が征夷大将軍に任ぜられたことにより、畿内の情勢は統一へ大きく傾き、畿外の播磨にも影響を及ぼした。信長は播磨に数回兵を出し、1577(天正 5)年 10 月の三度目の出兵時に大将に任ぜられたのが羽柴秀吉だった。この時の秀吉は同年 8 月の加賀遠征での失態を挽回するため『信長公記』(近藤 1969 所収）に「播磨国中、夜を日に継いで懸けまはり、悉く人質執固め」とあるように、懸命に働き必死に功績をあげようとした。そして、味方の謀反などもあったが、順調に播磨を攻略して行き、1580(天正 8)年に秀吉の播磨平定戦は終わった。信長は、秀吉の功を賞して播磨 1 国を与え、秀吉は山間部の小盆地の三木城ではなく、平野部の姫路に居城を構えた。当時の姫山には、小寺氏の屋敷があり、その山下には幾つかの寺社があり、その周りには村々が散在し、いずれの村もかなりの人家が集まっていた（稲見 1960)。そこで秀吉は、『豊鑑』（国民図書株式会社編 1929 所収）にあるように「此所は

播磨にとりてかたつかた也。我すめる姫路こそは、くにのなかにして舟の便もよく、此国をしらしめん人は此所こそよけれ」と発し、西国統治の根拠地を播磨平野の中心市川の三角州上に移した。秀吉が築いた城は、『播磨鑑』(兵庫県郷土史料刊行会編 1933 所収)では「姫路ニ三重ノ天守ヲ建ツ」とあり、『豊鑑』(国民図書株式会社編 1929 所収)には「石をたたみて山をつつみ、池をうかちて水をたたへ、やくら(櫓)ともあまた造りつつけ、天主とかやとて家を組みあけて高くそひやかし、門々のかまへきひしく、かはらのいらか軒をならへり」とみえ、相当な規模であったことが推察される。そして、その後の調査から、天守閣は周囲に武者走りを設け、地下に穴蔵をもつ外観三重、内部四階建ての天守であったとされ、西国において最初の天守閣であったとされる。秀吉は、新城下に、「過半の町人・百姓を姫路山下へ召寄、市場を立たせ候事」と仁井田(1970)にあるように、秀吉自ら攻略した城の町人たちを姫路に呼び寄せ商業に従事させた。また、新城下に移り住むものには諸役を免じ、築城以前の借金棒引きしたり、税を免じたりした(姫路紀要編纂会 1912)。その結果、池田輝政時代にも存在する、生野町・竹田町・龍野町などの移住者による町が出来、商業が栄えた。その後、秀吉は本能寺の変を受け、明智光秀を討ち、信長の後継者へとのぼりつめていき、居城を大坂に移した。秀吉の去った姫路城は、秀吉の正室の兄である木下家定が配された。そして、関ヶ原合戦の一ヵ月後、1600(慶長 5)年 10 月西国の抑え・大坂豊臣氏への監視という任務を持って池田輝政が姫路に入封するのである。

1) 姫路の城下町プラン

池田輝政は、1600(慶長 5)年に三河吉田 15 万 2 千石から播磨 1 国 52 万石の大名として姫路に入った。秀吉が建てた城は、小ならずといえどもも、急速に発達した火砲の威力や軍団の規模、戦術の推移に伴い旧式の感が強かった。そこで輝政は、52 万石の大大名として、西国将軍と称されるにふさわしい城を築くことを決意した。輝政入

封の翌年 1601(慶長 6)年、面目を新たにする新城の構築と城下町の建設に着手した。普請奉行は筆頭家老伊木忠繁、大工頭梁に桜井源兵衛、石寄せに榎村長之、築城用道器類係に芥田充高などをそれぞれ任命するとともに、領内百姓を総動員してその工事に当たらせた。

当時、姫山東北方中国山地に発した河流が野里村（姫山東北方）で二流に分かれ（二股川）、姫山の東西を流れ、東流を藍染川・青見川その下流を飾磨川と称し、西流は姫山と男山の間を南流し、妹背川・雲見川下流を三和川と称した。現在の船場川の川筋はこれにほぼ相当し、現在の市川の川筋に二股川の分流小川が流れていた。姫山の西には至近の距離に男山・景福寺山・栗林山等の小山が起伏し、西北方には標高 173mの八丈岩山がそびえ、その背後には中国山地の支脈に連なり、南は低平な平野を隔てて播磨灘に臨み、東西は共に 3～4 キロを隔てて乱立する丘陵地帯に対する。

輝政は、築城にあたり、まず姫山周辺の寺社を移動させ、内・中曲輪の区画内となる、中村・宿村・国府寺村・福中村などを立ち退かせた。そして、二股川の本流に当たる姫山東流の藍染川を廃し、分流小川に本流を通じ城域を開いた。この付け替えにより城下を氾濫から守り、同時に外堀に利用、防御ラインとして利用した。今の市川がこれにあたり、旧川筋は城東の中堀に利用した。

そして、城郭の縄張をするにあたっては、その地形を考察し、従来城郭を築いていた姫山を中心として、東南北に広く、西に狭く、姫山の東北のふもとから城下北東の堀留にいたる一大螺旋状の三重（内・中・外）曲輪をめぐらすという壮大な惣構の大城郭の縄張を行った（図 11)。全城域の規模は、外曲輪東西約 13 町（約 1400m）、南北約 17 町（約 1800m）、周囲 1 里半（約 5800m）に及び、面積は約 70 万 7 千坪に達した。

こうしてつくった城の内曲輪には、天守閣をはじめとした城郭施設、中曲輪に政庁や高級武家屋敷、周囲の外曲輪には下級武家屋敷と商人・職人等が住む町屋群を整然と配置した。市街地は中曲輪と外曲輪にわたって造られ、『池田家履歴略記』には、「内外の郭をひ

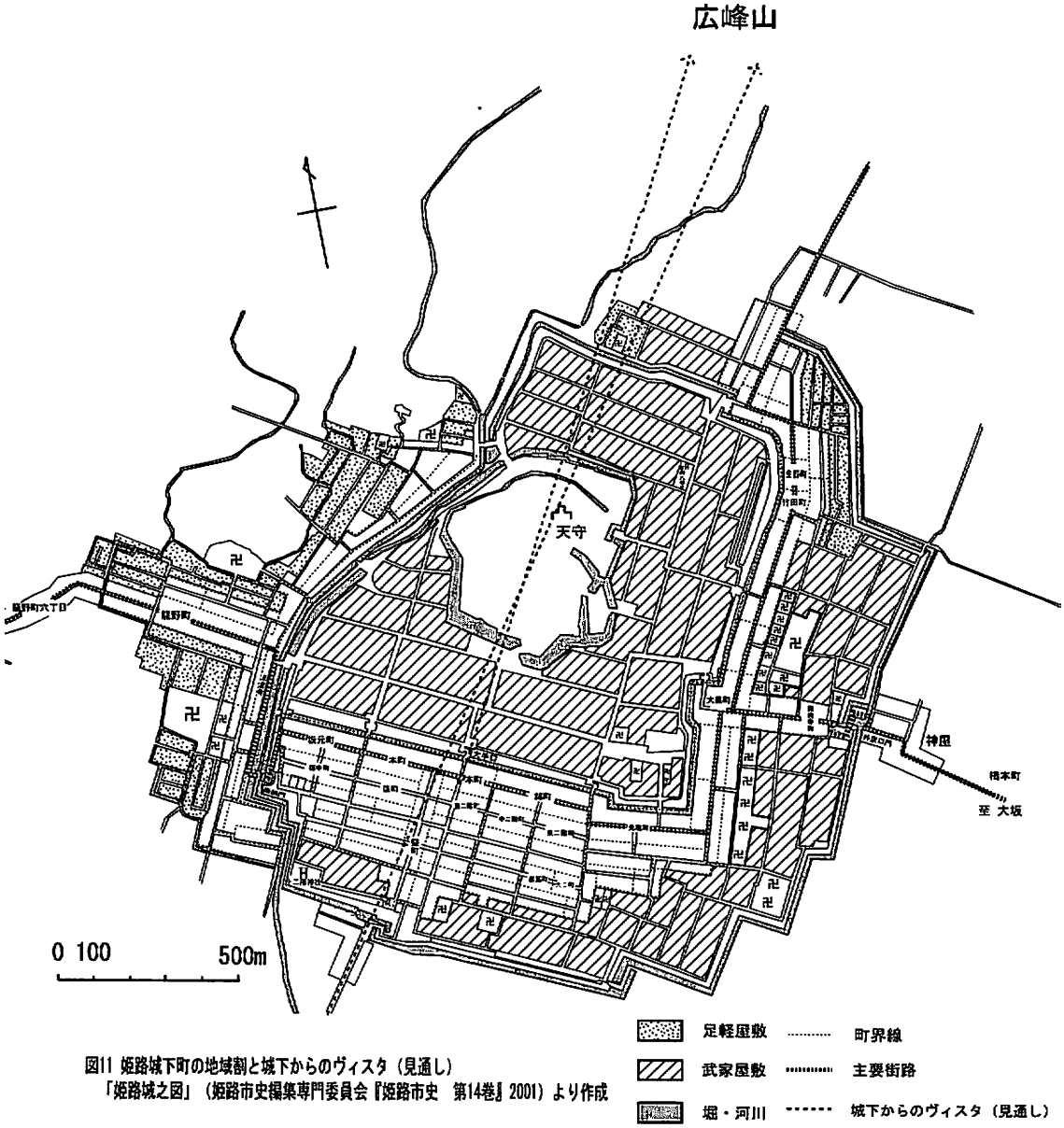


図11 姫路城下町の地域割と城下からのヴィスタ（見通し）
「姫路城之図」（姫路市史編集専門委員会『姫路市史　第14巻』2001）より作成

ろめ八十八町の市鄽をひらき（後略）」とあるため、総じて「八十八町」と呼ばれた（実際は七十八町だったが、縁起の良い末広がりの八を利用した（姫路市 1991））。その市鄽、すなわち町屋については、「東ハ橋本町より西龍野町六丁目迄東西三十六町五拾間七寸、南飾磨門より北ハ威徳寺町まて三十三丁廿間三尺三寸といふ」と記している。中曲輪は前述の通り、侍屋敷があり、外曲輪は一部に組屋敷建て、足軽・同心などの住居とし、外曲輪外方に設けられた組屋敷もあった。しかし、外曲輪の大部分が町屋で、市店を営ませていた。町屋地区では、大手門前の本町・綿町・坂元町の通りと、二階町・俵町・福中町などがメインストリートで、これと竪町などの交差点が賑わっていた（橋本 1994）。職人町は外京口門前の鋳物師町や鍛冶町など曲輪外の各所のほか、外曲輪内でも裏通りに分布したことは、大工町・（東・西）紺屋町・新見町などの町名からもうかがうことが出来る。加えて、姫路城下に、米屋町・綿町・（東・中・西）魚町・など職種別の集住性や当該町の有力商人の営業種目に因むもの、あるいは景福寺前町など寺社名によるものなどの町名が見られる。なお、吉田町は輝政の前領地三河吉田より移住の者たちに因むという(姫路市 2001)。

輝政は、陸上交通を整備し、城下繁栄策として、外曲輪に街道を引き入れた。中世期の街道は、北方の山沿いを西行していたと推定される(谷岡 1964)。このように、かつての街道が山麓のほうに偏っているのは、市川本・支流の下流部の河道の安定化が遅れたためである。輝政はこれを、神屋を経て外京口門から外曲輪に繰り込んだ。国府寺町・大黒町と進み、西に折れ元塩町・綿町・本町・坂元町・福中町を連ね、備前門から曲輪外に出て、船場を米田町まで北上し、そこから西へ龍野町となり、車崎へと向かったのである。なお、このうち神屋から船場の4キロの間に、街道の屈曲箇所は 19 あり、そのほか、内町では十字型の街路交差 34 ヶ所に対し、鉤状型 28 ヶ所、丁字型 122 ヶ所を数え、曲輪外でも前者 14 ヶ所に対し、後者は 18 と 142 ヶ所を数えた(横山 1950)。これは、いうまでもな

く、防御上の配慮といえよう。

こうした、街道の城下編入方式は、矢守(1981)によれば、①街道を大手通とする大手門終点型、②大手門前に横付けにし、大手通とは直交させる大手門横断型などに分類されるが、姫路の場合はこの②型である。さらに言えば、前述の吉田城も②型である。そしてこのメインストリートたる西国街道だけでなく、大黒町から北上して生野街道につながる（上・下）久長町・竹田町・生野町なども含め、ほとんどの短冊型ブロックが、城下を貫く街道及びそれに並行する街路に間口を開き、この姫路城下町もヨコ町型城下町といえよう。しかし、このヨコ町型が形成されている中で、注目されるのは、大手門より南下する道が、本町やこれに並行する西二階町などに「町通り」としての地位を譲り、自らは横丁なみの大手筋となっているのだが、その一本西側を南下して飾磨門から飾磨街道に通じる「竪町」はその名の通り各戸が間口を並べる町通りとなっている。姫路七不思議として『播磨鑑』（兵庫県郷土史料刊行会編 1933 所収）に「横ニ竪町、東ニ西光寺」とあり、「横」とは、ヨコ町型の町割の姫路では、大手通及びこれに並行する街路が「横丁」ということで、前記の竪町だけが例外的で「不思議」とされているのである。ヨコ町型が徹底すると、膳所・篠山・高槻などのように、大手通が大手筋としてさえ残らず、消滅してしまうが、姫路の場合は、大手通は大手筋として地位は低下しているがその横に大手通に相当する竪町を走らせている点に、輝政は、タテ町型プランの先駆者でもあり、自らを盛り立ててくれた秀吉に対する恩義の気持ちを込めたのではないだろうか。

輝政は、城下町整備に伴い、寺院の再配置を行い、寺町を設置した。まず、中曲輪の鬼門の方角（北東）には案内八幡社を祀り、裏鬼門の方角（南西）には外曲輪の飾磨門の近くに十二所神社が祀られた。そして寺町は、秀吉・家定時代から一部設置されていたが、合戦の際に武士が集まる軍事施設として重視されていたため、輝政も大坂に通じる西国街道沿いに各地から移転させた 15 以上の寺を

集め、城郭防備の一翼を担わせ、秀吉による「寺町」建設を踏襲した（図 11 中 太線枠内）。

このような、壮大な天守閣を有する城郭部を持つ城下町を建設できたのには、やはり輝政と家康の関係にある。1594(文禄 3)年輝政は家康の二女督姫を継室に迎えて、家康の女婿となっていた。このことが、関ヶ原合戦後の大加増、播磨一国入封に作用したことはいうまでもない。さらに、輝政の子つまり家康の孫にも領地が与えられ、二男忠継に備前 28 万石、三男忠雄には淡路 6 万石が与えられた。輝政は播磨で検地を行い、実質 62 万石を領していたため、一族合わせると約 100 万石の大名となる。輝政と家康との関係にはもう少し立ち入って考えなければならない点が考えられる。『池田家履歴略記』には、輝政の三男に淡路国が与えられた話が出ている。輝政が奥から玄関に出てきて、家臣安東某に向かって、「淡路国をお預けになった。皆に伝えてやれ」と命じた。安東が走り出ようとするのを、輝政が呼び止め、「お預けになったといえよ。拝領したとはいうなよ」と念をおした。しかし安東は勢い余って、「お預けになった」というどころか、皆に向かって「淡路をしてやったり」と言ってしまったという話である。この話の中に「拝領」・「お預け」・「してやったり」の語がみえるが、「拝領」という言葉にみられる上下関係とは異なり、「お預け」の言葉には単なる上下関係とはいえない対等の関係が感じられる。さらに「してやったり」の言葉にいたっては、家康から淡路をせしめたというような意味であり、輝政の家康に対するいっそう強い対抗意識と認められる。もちろん、家康と輝政には明白な上下関係があるが、この話には幕藩体制下でみられる将軍と大名との強い上下関係とは違った関係にあることが感じられる。輝政には、戦国大名・織豊系大名にみられるような、一国（播磨）の公儀を預かっているという地方権力としての自負なり主張が見られ、家康に対する一定の独自性を有していたのであろう。輝政は『池田家履歴略記』にあるように「西国の将軍と申程の御事なりき」といわれた。この西国将軍の称にしても、家康の征夷大将軍に対抗す

る面を秘めている表現ではないだろうか。池田氏以後の姫路藩主は、「西国探題」や「西国の藩鎮」などと称した。これらの呼び名は、幕府のための西の守りという意味合いが強く、輝政の「西国将軍」「姫路宰相」の呼称とは、少し意味合いが違ってくる。東の征夷大将軍に対する西国の将軍であり宰相である。だから、姫路城の築城も幕府を守るための城という以上に、池田氏100万石の大名にふさわしい輝政自身のための築城であったと考えられる（姫路市 2001）。

以上のように、家康に対抗意識を持っていた輝政は、家康と張り合うがごとく壮麗な天守閣と繁華な城下町を建設した。これは、西国大名に対するという意味でも重要で、ただにらみをきかすとはいっても、武力一点張りで閉じこもり、人々を恐れさせ、近寄せないというものではなく、商工業者が集まり、交易が盛んになること、そういうものがこれからの城下の「強さ」でなければならないとも輝政は考えたのではないだろうか。

2）姫路城の景観演出

この項では、作成した姫路城の地図を基に姫路城の景観演出を検討する（図11）。

姫路城には2本の街道（西国街道・生野街道（但馬道））が通っており、また外曲輪南方の飾磨門からは、姫路の外港の役割を担っていた飾磨津への街道が発していた。まず城下を通っていた二本の街道からは、天守を望むような景観演出はなく、吉田城の着到櫓のように、街道を見通すような演出もないと考えられる。しかし、西国街道と大手門から延びる街路の交差点から天守を見上げた場合、正面に天守群、その背後に広峰山がそびえる。この広峰山には、姫路はもちろんのこと播磨一円の信仰対象であった広峰神社が鎮座している。さらには、城外の飾磨街道上からは、正面に天守、背後に広峰山の景観が演出されている。こうした、古来の信仰の対象を生かした景観演出は、吉田でも見られたように領民の人心掌握・権力の誇示が目的であったと考えられる。

4. 輝政の城下町プラン

以上のように、池田輝政が築城した二つの城を検討してきたことを踏まえて、秀吉系大名である池田輝政が、ヨコ町型城下町を建設した理由を探っていく。

まず、吉田城下町では、東海道を中心としたヨコ町型城下町を建設した。その理由として、まず、秀吉の統制下での移封であり、最優先事項は東国の家康対策だったと考えられるため、輝政独自の考えによる城下町は建設が困難であったと考えられる。すなわち、輝政入封以前に、酒井氏により東海道を利用した町づくりが行われていたのではないだろうか。家康の遠江遠征による岡崎～遠江間のスムーズな移動が求められ、東海道の道幅を他の街路より広い道幅に整備し、それに沿って町屋が建てられていたのではないだろうか。そして、輝政はそれをそのまま引き継いで城下町プランに繰み込んでいった結果、ヨコ町型プランの城下町になったと考えられる。さらに、輝政は城下南部に酒井氏以降続く寺町を残し、南方からの侵入に備えた。これは、ヨコ町型城下町の中にも、秀吉の城下町建設手法の一つである「寺町」の建設を盛り込んだといえよう。

輝政は姫路城下町でも二本の街道を中心としたヨコ町型城下町を建設した。この姫路では、権力の中心地江戸から距離が離れているため、権力者からの統制はさほどなく、ある程度自由に建設できたであろう。輝政は、100 万石にふさわしく、また東の将軍＝家康に見劣りしない城と西国大名に「強さ」を誇れる隆盛な城下町を建設するため、流通経済重視といわれている（中西 2003）ヨコ町型プランを採用したのでないかと考えられる。

さらに、この姫路でも、秀吉の手法の一つである「寺町」建設がみられるため、輝政は寺町建設を良策であると考えていたと考えられる。

ヨコ町型プランでは、経済活動が活発になる反面、タテ町型プランに比べ、権力を誇示する力が弱い。そのため、新領地に入封して

きた輝政は、タテ町型プランを採用する代わりに、吉田・姫路両城下において、城下（大手門）からの眺めに領民の昔からの信仰対象（山地）を取り入れた景観演出をすることで、新領地での人心の掌握と自らの権力を誇示し、ヨコ町型プランの弱点を補ったのであろう。

Ⅵ．おわりに

本稿では、秀吉系大名池田輝政に着目し、輝政がヨコ町型城下町を建設した理由を解明することを目的としてきた。本稿の要約をする。

池田輝政は、父や兄と共に、羽柴秀吉に仕える秀吉系大名であった。小牧・長久手の戦いで、父と兄を失った後は、秀吉から手厚い保護を受け、三河吉田 15 万 2 千石に入封した。当時の吉田は、東国の家康対策にとって要の城であり、陸・海の交通の要衝であり、秀吉は、東海道の最重要拠点ともいえる吉田に輝政を配置した。輝政は、秀吉に従軍し軍功を重ね、さらに、1592(文禄元)年からの文禄の役では、吉田にいながらも前線への兵糧の運送役と家康に対する監視の役を見事に果たした。この軍事・政治両方の才を持った輝政は、特に重用され、後に羽柴姓や豊臣姓を与えられるなど、秀吉の寵愛を受けた。しかし、他の秀吉系大名とは異なり、吉田に建設したのはヨコ町型城下町であった。その理由は、秀吉政権下の築城のため、輝政の意向よりも、秀吉政権の最重要課題である家康対策が優先されたため、輝政独自の城下町を建設することは困難だったと考えられる。そのため、前吉田領主の酒井氏による東海道を中心に町屋が並ぶヨコ町型プランを引き継いで城下町を建設したと考えられる。

その後、関ヶ原合戦で家康方につき、軍功を挙げ、播磨姫路 52 万石の大大名になった。この 15 万余石からの大加増は、もちろん関ヶ原合戦での功によるものであるが、それと共に輝政が家康の女婿となっていたことが大きかった。1594(文禄 3)年、秀吉の仲介で家康の次女督姫を娶り、秀吉の死亡後、家康方に肩入れをしていった。家康も、輝政の能力を高く評価しており、関ヶ原合戦後の領地配分でも、大坂包囲網の重要拠点でもある播磨と美濃どちらかを選ばせた。そして輝政は、家臣の忠言を聞き入れ、播磨を選んだ。播磨は、豊臣氏の大坂に隣し、外様大名の多い西国に接するという重要な位置にあるので、そこに有能な輝政を配したことは、家康にと

っても盤石の備えをすえたものといえよう。そして、この姫路で建設した城下町も、前領地の吉田と同様に街道を利用した町づくり、すなわちヨコ町型城下町であった。ここでの建設は、江戸と距離があるため、自由に建設できたと考えられる。輝政は西国将軍の名にふさわしく、東の将軍家康に対する意地と誇りをかけ、さらには、西国大名たちに武力ではない「強さ」を見せつけるため、流通経済に富んだヨコ町型城下町を建設したと考えられる。

このヨコ町型城下町は、公権力の存在を示す力が弱いため、それを補う策が必要であった。そこで輝政が吉田と姫路に採用したのは、城下からの眺めに、天守を見通しその背後に領民の信仰対象を添えた景観演出であった。これにより、領民の人心をつかみ、城を頂点としたヒエラルキーを見せつけ、安定した統治が可能となった。

本稿では、池田輝政という武将個人に絞った研究であるが、従来の研究ではあまり見られなかった試みであると考える。そのため、まだ明らかにされていない部分が多々あると考えられるため、未だに明らかにされていない城下町建設者のプランを研究することが課題だと考えている。輝政に関して言えば、輝政は播磨入国後、本城の姫路だけでなく、支城をいくつか建設している。輝政個人の城下町プランを明らかにするための材料は十分残っており、これらを研究し、本城姫路とのプランの違いなどを解明することが今後の課題である。

参考文献

足利健亮（1984）『中近世都市の歴史地理』，地人書房，111-132，221-230.

伊藤毅（1989）：大坂，『日本都市史入門 I 空間』，東京大学出版会，244-245.

伊藤毅（1992）：近世都市と寺院，『日本の近世 9 都市の時代』，中央公論社，81-128.

伊藤毅編（1993）：『図集 日本都市史』，中央公論社.

稲見悦治（1960）：姫路城下町の地域の形成と地域構造，神戸大学文学会研究 22，90-113.

内田九州男（1989）：豊臣秀吉の大坂建設，『よみがえる中世 2』，平凡社，34-55.

金井年（1997）：城下町プランの類型化—主に矢守類型についての若干の検討—，日本学報 16，31-45.

国民図書株式会社編（1929）：『校註日本文學大系 第 3 巻』，国民圖書.

小島道裕（1985）：織豊期の都市法と都市遺構，国立歴史民俗博物館研究報告 8，251-293.

近藤瓶城・近藤圭造編（1969）：『史籍集覧』，すみや書房.

斉木一馬（1971）：『史料纂集 第 4 巻』続群書類従完成会.

佐久間貫士（1989）：本願寺から天下一へ，『よみがえる中世 2』，平凡社，3-21.

佐藤又八（1971）：『船町史稿』，佐藤公彦.

新行紀一（2005）：三河時代—岡崎城主・田中吉政，『秀吉を支えた武将田中吉政—近畿・東海と九州をつなぐ戦国史—』，サンライズ出版，25-32.

関戸明子・奥土居尚（1996）：高崎城下町の形成過程とその地域性，歴史地理 38-4，1-20.

関戸明子・木部一幸（1998）：館林城下町の歴史的変遷と地域構造，

歴史地理 40-4, 19-37.
谷岡武雄（1964）:『平野の開発』古今書院.
玉井哲雄（1988）:『江戸－失われた都市空間を読む』, 三省堂.
豊橋市教育委員会編（1994）:『吉田城いまむかし』, 豊橋市教育委員会, 88-93.
豊橋市史編集委員会編（1973）:『豊橋市史 第一巻』, 豊橋市.
豊橋市史編集委員会編（1975）:『豊橋市史 第二巻』, 豊橋市.
豊橋市史編集委員会編（1976）:『豊橋市史 第六巻』, 豊橋市.
豊橋市役所編（1964）:『豊橋市史 史料篇 五』, 豊橋市役所.
豊橋百科辞典編集委員会編（2006）:『豊橋百科事典』, 豊橋文化市民部文化課.
中西和子（2000）: 藤堂高虎の城下町建設にみる織豊期城下町プランの受容と展開, 歴史地理学 42-5, 23-40.
中西和子（2003）: 織豊期城下町にみる町割プランの変容―タテ町型からヨコ町型への変化について―, 歴史地理学 45-2, 25-46.
仁井田好古等編（1970）:『紀伊続風土記 第4輯』, 歴史図書社.
橋本政次（1994）:『姫路城史 上巻』, 臨川書店.
塙保己一編（1893）:『群書類従. 第14輯』, 経済雑誌社.
塙保己一編（1958）:『続羣書類従. 第21輯 上』, 続群書類従完成会.
彦根博物館編（1991）:『彦根の歴史』, 彦根博物館.
姫路紀要編纂会編（1912）:『姫路紀要』, 姫路紀要編纂会.
姫路市史編集専門委員会編（1986）:『姫路市史 史料編 近世1』, 姫路市.
姫路市史編集専門委員会編（1991）:『姫路市史 本編 近世1』, 姫路市.
姫路市史編集専門委員会編（2001）:『姫路市史 別編 姫路城』, 姫路市.
兵庫県郷土史料刊行会編（1933）:『稿本播磨鑑』, 兵庫県郷土史料刊行会.

藤野保（1970）:『恩栄録・廃絶録』，近藤出版社.

前川要（1991）:『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』，柏書房.

松本豊寿(1967):『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館，293-304.

水田義一（1993）：和歌山城下町の形成過程—豊臣・浅野期を中心に—，和歌山地理 13，11-20.

水田義一（2003）：浅野期紀州藩の城下町プラン—和歌山、田辺、新宮—，和歌山地理 23，1-10.

宮元健次（2000）:『建築家秀吉』人文書院，43-51.

宮本雅明（1993）：城下町の類型—縦町型から横町型へ—・ヴィスタと景観演出，図集日本都市史，東京大学出版会，172-173・174-175.

宮本雅明（1996）：城下町の空間類型，年報都市史研究 4，山川出版社，3-15.

森岡栄一（1988）：長浜城下町の成立について，滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要 6，17-42.

藪中数浩（1993）：新宮城下町の形態と構造，和歌山地理 13，53-63

矢守一彦（1988）:『城下町のかたち』筑摩書房，3-84.

横山忠雄（1950）：姫路の城下町的特質，『播磨郷土文化 6』，播磨郷土文化協会，20-34.

渡邊秀一（2004）：豊臣系城下町の発展過程からみた大和郡山の初期町人地—長浜・近江八幡から大和郡山へ—，鷹陵史学 30，119-140.